

嫁君の源家の類
嫁君の平家の落人蝶花形名歌島臺

○序詞

作 者 若 竹 笠 身
中 村 魚 眼

昏禮の禮の本なり二姓の好を合せ、上以宗廟又事下以後世を繼敬慎重正の教宜なるか、男女別有夫婦有、かためハ雌雄の蝶花形相生祝ふ島臺や、かへらね例久方の天津御位一百八代後陽成院の玄ろし召御代こそ殊々豊なる時維天正十四年五月下旬宣命の旨を傳へ紫宸殿又伺公の公卿の前の中納言經行朝臣右大辨兼忠公左右又笏取座し給へば階下又ハ當時武家の棟梁真柴大領の臣加藤虎之助正満つゝいて周防の國主大内島の冠者が臣出海左衛門宗貞其外百司百寮衛固の士威儀を守つてならびるる經行卿仰出さるゝ、今天下やうやくよ治り太平を樂しむ代なるよ、眞柴久吉大内義廣互々威勢を諍ふて合戦を企る由

獻聞よ達シ宸襟更よ穩ならず。これよよつて眞柴が重寶、日月の旗、大内
よ傳ひる勘合の印、互よ取替兩家共以來ハ疎意なき心を示し和議を調
へ、朝廷を永く守護致せよとある勅命なりと述らるゝ、正清謹んで有難
きに勅諭民の歎きを思し召れ無事を計らふに仁德出海が所存ハ存せ
ず、此正清よおぬてハ、主人久吉よヤ迄もなく和睦の義委細畏り奉ると、
ナ上れバ出海左衛門仰を背き寶をバ渡さぬとナセバ違勅の科其方迎
も得心の上ハ、此方よ別心あらんや、同じく承知仕ると、頭を下れバ右大
辨嘲笑ひ、ハ其方共が妻ハ小坂部兵部が姉妹の娘、互よ縁者の中とて早
却の勅答、云合せが見へすいて、此右大辨ハ呑込ハ和睦を計るハ寶の取
かへ贋物ハ乞らぬ事、誠の寶ハ眞柴家よハい筈の事、ヨハ兼忠卿の詞共
覺へず、先代を傳はる日月の旗、眞柴の家よない扱とい、何を證據よ何
を以て、ヤア知まいと思カ、春永亡失し跡、柴田が所持せし日月の旗、比良

が嶽の落城を勝家が後家小谷春忠が伴三法師春姫共々行衛知ず必定
其手へ渡りし旗どふして有ふ筈がないと傍若無人云ほぐせば、經行
卿座をすゝみ、賓の詮議の無益の沙汰受取り大内が役目、此方より構わ
ぬ事と、詞の理詰より右大辨口を開たる其所へ、豊後の守護職大友三郎家
來よ目馴ぬ兵器を引せ、庭上遙々手をつけば、右大辨詞をかけいかよ三
郎持參の兵器の何物と尋ねば、ハテそれこそ大内の家より専ら用ゆる大
筒とす物、去年以來堺を論じて毎度の合戦、それより居る出海城も某よ切
立られ、狼狽廻つて逃玄なよ、此大筒を取落せしを久吉公へ獻上の爲は
るト、持參仕ると顔真赤よ驢の皮、右大辨の片頬よ笑ハテ扱聞しよ違ふ
大内が憶病いかよ逃るが好玄やとて此仰山な大筒を打捨置とは餘り
の沙汰と嘲罵すれば左衛門聞かね大内の武勇よ攻付られ、久吉公へ助
力を頼む大腰抜、それより何ぞや兵器を打捨逃し杯とは奇怪千万其大筒

は引金くじけ、再び用ひ立ざる故、取歸るも面倒と退陣の節捨置しを、拾
ひ取ての手柄顏片腹いたしと嘲笑へば、詞負ふしみのへらず口、引金は
損ねたか但し、置て逃たのか、改見んと立かしれば、實出海が詞の如く、
引がね損し大筒よ放した嘘の當違ひ、しよげり入てぞ扣へるる、經行卿
笏取直し、兩家の重寶取かゆるば、則大内の領國宮島の千疊敷下向の勅
使同絹笠三位、其旨心得左衛門も、早く歸國正清も、急いで出立有べしと、
仰よばつと立上り、彼大筒を家來よ引せ、此大筒は大内の兵器、他家よ置
なば奪はれしと嘲る者や有ぬらん、此正清が下向の砌是を土產おだやかと穩よ、
納る胸の智仁勇、出海大友兩人も、此場を立が弓取の、心和ら々、大内山風
ものぞけき

○貳冊目

かる櫻見せ物力持芝居の太鼓打交て音ひどんくとさくと押合へし

合ふ宮嶋の群集の實も人の市暑彌増計也、參り下向が立留り、何と今年の市へきつい賑でないかひの、其筈の事、此宮嶋を取てござる大内様と久吉様と既に軍に成所を、禁中様の挨拶で何もかも丸ふ納り、勅使様が見へる故隨分賑かみせいと殿様からのお觸えやへいの、夫で讀たそして、雛助や新七も下つてゐるげな、次手も一切見よふかい、
ふりや芝居より評判の水豹、
みせふと巾着の底を探つて足早よ思ひく
み走り行、
折も此頃鳴響く鐵砲組の男作、先へ頭の種が島、
二ッ玉めつた二人を投頭巾、下駄も姿も一様よ思ひ、合たる惡者作り、大道
よつしはたかり、
頭、大友殿も頼まれた勇次郎や大隅も逢たい物でござ
んすの、それ此二ッ玉も道もがんばつてゐれど、とんとあらはれぬぞや、
サよいて、とふで爰へ出てくる二人、相人へ高が町人おれがする程の事
もないうせたらわいら二人して、合點でござんす、頭は先へ、そんならお

れは千疊敷へ行程よ、後から二と三人が、心ひ一ツ一道へ引わかれでぞ
歩み行闇の夜の、梅よいあらで、風薰る、位も松の、玄やれ姿、名も大隅が住
馴し、廓放て氣も廣ふ、千疊敷への揚や入、拔八もんじの、傘の内、さす手引
手よ氣を付る、やり手禿よ打交る、客ハ大内へ出入の町人、岩國屋勇次郎、
若殿育のうかれ好、幸頭末社、み誘ハれ、來かしる跡を二人の惡者、ヨレ待て
下んせ、待て貰ふとのさべり出れバ立止りトコロ、すかん待と云んじたハ誰
じやと思へば、火蓋様ニヒタガミ玉様何ぞ用かヘ、太夫主こなんよ用ひあい用
の有ハ此勇次郎、外の事でもない、大隅太夫がおいらが仲間へ貰ひた
ひ、火蓋のいふ通り、去人よ頼まれた此せりふ、いやといかんすりや腕
づく、サア返事ハどふ玄やと、きめ付られて勇次郎、おの様よいふて玄やが、
何と云てよからふやらのふ太夫、ア大事ござんせぬ、譬勇次郎様がそと
いりんしても、わたしがいやでござんす、お前方が男づくで頼れたせり

ふなら、わたしも勤の意氣地命よかへてもいやでござんすぞへ、いま
いましい引さかれめ、そふぬか玄やいつそやけ、われみ構ひぬ相人へ
勇次郎、男づくで貰ふの玄やと二人の身構へ立掛る、後より始終立聞侍、二
人を取て投付れば、起上つて頬をかめ、ゑらいめよ大隅め覺ておれと
逃歸る、太夫の思はず見合す顔面、お前の大友様イササ何とも云まい、爰の途
中、狼藉者の難義を見かけ、救ひ出たる武士の情、そんなら是迄いらへ
もせぬつれないわたしよ恨もなふタガつれない仇を恩で返すの色いろ迷
はぬ身共が潔白、邪魔のない中、勇次郎とやらを連、千疊敷へ早く行さ、
嬉しうござんす、そふいふお心とへ露しらす、日頃のお詫あやり又重ねて、あ
なたもちやつとお禮をと、太夫が詞ことえ勇次郎ヨウジラどなたかの存せぬ共先程
おのほ懇情添しと手をつかゆれば、何のくク禮マツリ又及べぬ、一刻も早ふ
早ふよ奉頭末社ヒツヂマツシいきり出し、是からわつおり酒さけとして、此めいりを取

戻さふく出と先立めつたむせうよそしり立さめき連て、行跡へ、
あたりを窺ひ以前の二人、差寄て、太友様仰の通み今仕打間、二人共太
儀く、斯情からまざけを見せ置て、大隅めを取入るこんたん、又其外よ密事の評定、
大藏も待をれば千疊敷でサ合さん。然らば我等もは供と皆打つれて歩
み行、當國下向のは勅使絹笠三位間光高卿、衛固の青侍前後を圍ひ、並松原
よ、よしかしられべ、それと見るる木村和田藏、乗物間近く手をつかへ、は勅
使のは迎ひとして、加藤正清が家來木村和田藏、是迄參上仕るとサ上れ
バ光高卿、は乗物を開かせ給ひ、其方へ正清が家來よな、出迎ひ太儀、此度
勅命を以て眞柴大内が爭戦そそがんを止め、則今日千疊敷みて、互の寶を取かれ
す約諾、正清も下向の砌、日月のは旗持參致せしで有ふな、バ然らば正清
へ光高が土產とくれんと乗物の、硯引寄短冊たんざくと書認したゞむる一首の和歌、和
田藏謹んで押戴おしいだきあるしなき、音をも啼かな驚えいきの、ことしのみ散花なら

なくよ、ヨリヤ是古今集躬恵が歌、古歌を以て志るしなき心を志らす賜ハスリヤ
大内家の寶ハ此歌の言葉の如く志るしなく紛失せしとの内意でござるかな、ボチ達明察勘合の印ハ大内が家臣陶全姜反逆の砌より紛失の
よし慥々聞置其心を以て正清も取計らふてよからんと傳へよハ重よ
のほ懇情主人正清も兼々此義合點行すと存ぜし故大内が館へ忍びを
入置ひと、ヤ上れべ光高卿智勇を兼し正清が抜目なき働き、さこそ有べ
し委細ハ猶も面謁と乗物立させ光高卿千疊敷へ急がるれば、お暇願
ひ和田藏ハ旅館をさして「立歸るヲツト」爰らで此きよがわたしの形の前垂
よ此間鍋での繪口合、あかいの町の大跳子、ヨリヤ又志こいゑら志こい次
差詰此春野此とさんをバ爰も置此取肴で思ひ付、とさん何志やと姜で
ヨリヤ又志こいゑら志こい次ハ差詰太夫様智恵貸かく、智恵からぬく
わたしがそこらで代りま志よ此團扇をバ爰も置、又扇をバ斯捨て福

團扇、扇の外にどふ玄やいな、又ゑらいゑら玄こい、扱此次の權八さん。
ヤア憤が、胸悪い、く、エ、きたあ、八百や店玄やないかへ、イマカウ斯玄た所を繪面
よて、ならすよ似て、へどを吐、どりどふであろ、ヨリヤ又わるいゑらぎたあ、扱
此次の誰玄やいな、智悪かそか、く、ア、ヨリヤ其様な愚痴合ハタチによしよして酒
みせい、くと、又呑かける勇次郎イマヤ旦那の其丈夫より、いかな權八も大
避易ハタハタ常の酒でも有事か泡あわもりとい、聲でござります、坪の明ぬやつ、此
酒ハおいらが常玄や、アツゲく、と、差出す盃さかづき申、其様ハシメよ酔ても大事な
いのかへ、げふハ此千疊敷を揚屋ヨウヤとして、殿様の御名代出海様を饗應役
目、それよまあ其様ハタチ太夫大事ないわいのふ、左衛門様の堅カタどうよ、
逢てぬたら勞疚病ラウギヤウブ、兎角浮世ウタカクフジシの色と酒、これな源太様此頃ハタチ、聞バ軍が有
そうな件くだんの鎧よろひ、どうなさる、だんあいく大事あい、鎧よろひも兜かぶともいらばこ
そ、さほく、竿竹玄や、騒く折しも次の間ハタチ、勅使のお入と警蹕けいりゆうの聲

聞ゆれば權八けんぱ、見へをして、お勅使様おとしやうといざ先是へはじあれあれの眞ままの
お勅使おとし玄くわやくわやいい、おりや又芝居事しばゐこと玄くわやと思ふて居ました、そんあら
私わたくしらは、何所どこぞへ散ちがませふかいなま、それ太夫おとひを連つれて奥おくの間まへ、早はく
よ大隅おおぐちも、皆みなも一間いちまへ立て、行跡けいせきこなたこなたより出海でかい左衛門宗貞むねさだ、禮服改れいふかめ出迎
へば、程ていなく入來いりくる絹笠三位衣冠きぬかさみの姿すがた氣け高くも儲たまけの、御座ござよ着玉きぎょくへば、
跡あとよ目馴なれぬ地下育くちやくいく譯わけ白齒しらきの振袖娘ふくろむすめ恐おのく出て畏おそる、左衛門女めのわよ目めを
付つて、見みれば賤いやしきあり形かたち高貴たかきの前共まことに譁なづからす、お次ひがよ扣ひきし其女そのめのわは、いか成
者なつめのわと尋たずねばば、不審しんひ尤よ此女このめのわの都者成まことが、嚴島いつしま詣まいの道みちよて、連つづの女めのわよはぐ
れし由ゆいふも分わからぬ痴病ちびょう見るよ忍しのびず不便ふべんよ歸洛きりらくの砌連せきつづ歸きり、親成
者おやぢよ渡わたさんと、是迄召連まきつづ來きりしと、仰おのよ出海頭でかいとうを下くだ、有難き御仁心おんじん感かん
るよ餘あまり有あ、シテ大内家おおうちけへ仰おの下くださる勅諭おとしゆの趣承しゆしようりたしと演說えんせつすれば正笏しじ
有あ抑おの眞柴大内まなしばおおうちの國家こっかの柱石ちうせき虎狼こぶろうの心こころを狹せまば、民みんの憂少うひすくわからず、是よ

くて兩家共互々寶を取かへし、和義を調へ禁庭を守護せよと有帝の宣命、それ又付心得ぬゝ加藤正清先達て紛失せし、日月の御旗をば何と御意なさるゝヤ彌御旗ハ、アとくゝ紛失、春永滅後、行衛知ざる御旗をば有と云拔真柴主從、うかつゝ寶ハ渡されまぢハ、某も正清を、合點行すと存ぜし故、寶の實否を探らん爲、とくより旅館へ忍びを以て、ホツ拔目なき汝が勵道ハ大内の執權、さこそく、寶取かゆるハ申の上刻、先それ迄り奥殿よて、休足せんと御立有バ、出海左衛門勇次郎又打向ひ、光高卿の御目かけられし此女御出館迄間も有バ、此浦の名所古跡誘引有と氣を付て、勅使又引添亥づくと奥殿、さして入よける、跡又につきほ媚きし、顔又見とれて勇次郎思はず傍へ差寄て、瘤又へ惜い品形、田舎又京も及びない、手入ずの初薈我等口切致したい、コレどふじやくと手を取ど、身の口なしの色始何のいらへもないのが返事、そちら向ひ否か、かぶりふるハ

應かいの、どんと分らぬ、壬生狂言獨修羅くら燃そふより、つゝ一筆と傍成、料紙取て差出せば、耻し顔と散紅葉鹿の、巻筆喰しめし、心のたけをかくとだみ、繪に忘れかしのはんじ物、手よ取上てこりや何じや、羽根と手鞠とおに鬼の面を書たのれ、來年の事いや鬼が笑ふといふでも有まい、聞へたく、嬉いけれどこひいといふ心じやの、ハテ初心など引寄て抱えむれば亥め返す、袖と袖とのふり合せ、これぞ他生の様づたひ出合頭と大隅が、それと見るをかけ寄て、今よ始ぬ悪性も、殿は常といひもせふ、物さへいられぬ瘧の身であた徒な、お前を爰と置からじや、サアござんせと手を取て、行をやらじと隔る娘邪魔さんすなどやら腹立、憎氣嫉妬みひとつおよなふ振放されて思はずも、され待てと縋り付、聲と驚き、笑止、物の云ぬの瘧亥やのと、男を寐取狩へ事、仕そふした事亥やない、是より深い譯有れど、白地よりいられぬ時宜、大事の殿は又惚たかと、瞼とくから

ふ大隅殿、諸譯とやら手管とやら玄らぬ田舎の藪椿松の位と及びない、
戀路と云れど姫ごせのせつあい心思ひやりたつた一度の逢瀬あふせをバ歎ゆる
してたべとかきくどく娘心ぞ、わりなけれ、折から出る必共のお勅使様の
召まするお娘様アあれへ早ふお出ア是非なくも連て入跡、式臺カ加
藤正清參上ト、玄らせの聲ア大隅カ小陰へ忍ぶ間もあく、英名千里を走
るが如き虎之助正清、風切肩衣故實ト正し、優々と打通り、それよりある
義廣の手廻りの者成かイ私めハお出入の町人岩國屋勇次郎とナ者で
ござります、立入致ハ存じつらん、今日此千疊數アおぬて真柴大内
の實ア取かへ、両家和睦カをなすべしとの勅命據よんきよなく、主君久吉の名代と
して爰ア來る加藤正清武名ア聞ハ出向ハざる臆病カ至極の冠者義廣、
但しひ大内が國風成カ、失禮なりと不興の躰ア憚ハりあがら加藤様のふ
詞ア共存じませぬ何ぼ武勇烈はげしいああた様アでも、不知案内の敵の國謀はかりごとを

以て討時のいかな勇者も欺く手なし。又實と寶が双方へ納らぬ其中に
まだ敵々、下々でやせば喧嘩の相人、中直りない先へ式作法より及ぶま
いかと存じまする。某又向ひ、左程の事いへんず者覺へない。町人よ
へ惜い男器量を見込用事有げ者共持參の兵器早是へばつと答へて家
來共、ゑいや聲してかき出る。南蠻流の國崩し目通りよさし置べ。勇次
郎とやら、大内が工夫の此大筒數千の敵を打ひしぐ火術の徳有よもせ
よ、人力の及ばざる、久吉公又敵せんといいつかな叶ひぬ、有て無用の軍
器なれど和睦の志るし我手土産、取次致してくれまいか、加藤様の御意
と申、お屋敷へかしつたは用、玄かど承知な、満足と件の大筒左右の手よ
苦もなくぐつとさし上て盤石碎けと投付るを得たりと請たる金剛力
さしもの正清横手を打重さ數斤の其大筒、色も變せず請留し、器代の勇
力驚き入、是がほんの怪我がのはづみ、お目よ留て迷惑千万、此様子に

前へと詞少すくなり立て行ゆ 大内島の冠者義廣先待まつれよと呼かくれば、ディヤ私
の生れの町人、思ひがけない名を云いふて、おなぶりなされて下さります
なま、賤いやしき商人と姿をかゆるも危あやふきよ近寄ちかよらざる君子の教おしへを用ゆ
る名將イヤモいかやうよ御意なされても町人の岩國屋と申いふ相違ござ
りませぬま、名を隠す事ことの安く、徳を隠す事ことの難かなし、ハテ町人よ、是をほ
縁えんよお出入しゆりゆを、申付しゆふる折おりも有あふ、お縁えんもござらべ、ざら
ばと詞數ことすう、云いふねど底意さとり探合たんごふ武士、町人の沙境しゃきょう隔はなあふたる、奥書院、心殘こころざて
打通だつとうる、其間うちを待兼まつまへかけ出だる大隅おゆく、わ志わぢやお怪けが我わが有あふかこと、あぶくく思
ふふいていたいなま、怪我けが我わの代かりよけよくい相人あいじんほつどりと退屈だいじゅく、是から
わつさり廓酒くろわ、おざや太夫たうふと打つれて行先ゆき向むかふを立たて切きる大藏だいぞう、貰もらひか
つた其大隅おゆく二言事ごんじほざくと玄あらめ上あがると、摑つかみかしるを、身みをかへし、太夫
が代かわりよ請取うけとりと、以前の大筒取おづのとりより早くはやどふと、投なげば、透さかぬ強力きょうりょくさも

つたりと請留れど、重さよつられてたちくく、尻居よどつぱり、見や
りもせず、手を引あふて二人連廊を、さして出て行^{ハテ}よつとい二才め遁
さじと、かけ出す後へヤレ大藏早まるなど、聲かけ出る大友三郎、さやつこ
そ正しく大内義廣、容易^{ヨウリ}より討取がたく、自滅せんす我計略是こそ、大
内が家々傳^{ヒタチ}いる勘合の印^{シテヤ}先達て其寶を、シ高い、くと兩人が、ひそめ
く奥^{ガク}、樂器^{ガクキ}の調べ笙の音色もさへ渡る、廊下づたいよ光高卿^{ルヂ}路次よて
玄めし合せし如く、其印だよ差上なべ、望^{モカ}任せ真柴大内征伐の院宣成
ぞ、有^{アリ}がたく頂戴^{テウダツ}せよ、バ、有^{アリ}がたしく、此上^ハ久吉でも大内でも宣言を
所持する、某^{モチ}よ背かバ朝敵^{トドケ}此上ながら禁庭^{キンテイ}宜しく光高卿^{ルヂ}と印を渡せば、
裝束^{ショウヅ}の袖^{オホ}よ納^{ハセ}むる勅使の底意^{モトニシ}善か悪か^ハ白書院ひゞく時計^{ヒツキ}も酉の刻^{ハシメ}
ニア大藏^{ハシメ}汝^ハ早く濱手へ廻り、勅使の乘船用意せよ、畏つたとかけり行^{ハシメ}折
から、騒ぐ奥座敷^{カツラ}追取刀^{スサノ}出海左衛門、よがり切たる正清も、勅使の御座

と見るよりも、思はず左右より平伏す。光高柔和の氣色にて、三けしからざる二人が顔色仔細いかよと有けれど、謹んで手をつかへ、兩家の重器を取かへよと、勅命よしたがひざる久吉が我儘わがま、サア正清、勅使も是よ御入りなるぞ今一言云ふて見よ、其方の寶も出さず、月日の旗を請取んど、表裏ひうちを以て人あざむを欺く、れど股武士といふたが何と、サア表裏との舌長し、旗を出さず、バいつ迄も、いつかな寶たからの渡さぬ左衛門、そりや此方も同然ば勘合の印落手いんらくしゅの上望の旗はたの渡しきれふ、併其印の先達て、陶すなが反逆露顯はんぎやくけんの砌紛失きぎりそんじゆしたで有ふがなま、小田春永没落ほづきより行衛しえ知ざる月日の旗はた、吉是を所持せしとの偽うそりで有ふがなま、此方よ所持してゐる、ヤア勘合の印の大内の重器紛失せし覺おぼへない、亥いかと有かよ、おんでもない事見るをよ、見せふと双方が忍びの鯉口切刃さちのこの争ひあつ、勅使の前まへも憚らぬ水かけ論、此上うへの両方の寶たからと寶たからを突出して、取かへ召れど大友が、うひべよ

作るお爲顔よきと計光高の仰ふはつと二人の勇士西者共四人引と
呼られべ、承つて兩方ア忍びと見へし黒裝束めいく主人が傍近く、引
すへてこそ扣へぬるア宗貞此曲者覺へあらん、月日の旗を奪へんと、我
旅宿リトシユへ忍び込し大内が家來旗のかいりと請取かチ此曲者も義廣公の
旅宿へ忍び、勘合の印を奪へんとせし眞柴が家來、助け返すを有がたい
と、旗を渡すかさもなくば、西國武士の手並を見せふ、是非渡さずバ數
万騎アの軍勢を以て、義廣が首も寶も請取正清ボ、面白し取か遣るかハ軍
の勝劣、相聟變ヘンじて敵同士、一家の因も、兩家の和睦も俱よ破斷ハの敵と、敵
軍神イニシヨウへの血祭りと忍シテと忍を兩人が拔間ハサカも稻妻ハサツひらめく刀、首ハ彼處へ
落ハシマてけり、斯と聞る家中の諸士、正清歸すハシマすと討取ハシマと、矢襤ハシマつくつて取ま
けべハシマ待旁カタマ只一人の敵を恐れ、討取しと沙汰ハサツ有てハシマ、大内の武勇鍼ハシマきよ
似たり、皆引れよと、大度の詞、智勇ハシマ其名出海ハシマ、實大國の執權也、正清ハシマ

つこと打笑ひ、數度の軍場も鍛ふたる、加藤が五躰の鐵石同然、なまくら刃金の矢先も立ぬ、其廣言を左衛門が留るゝ戰場手練の館先、勝負は互の天運次第と並ゐる諸士も目もやらず、出行勇將、見送る義者、別れてこそひ立歸る、引違へて庭先へかけ来る家來があひたゞしく、勅使下向の折も折、又もや絹笠三位ありと、只今是へど志らする中、早昇すゆる乘物の内を出る、其勿体堂上乍ら丸裸立はたかつて正笏し、我こそ絹笠三位光高、路次の狼籍、何者がかゝる仕業を武士共哀めよやと、計みて、ふるひ聲ある勅使の趣、耳もかけず以前の勅使、眞柴大内が再度の確執歸洛の上みて奏聞せんと、座を立給へば、ア勅使と成て入込曲者、こそ動くなと、詣寄宗貞、寄べ切んと眼を配る頭上もふしきや數多の白鳩群をなすこそ怪しけれ、左衛門屹度見拵こそく、宇佐八幡の自現もよつて、當家も授かる白鳩裂、勘合の印の袋となす、世俗も是を大内裂と、聽れ名高

き希代の重器今目前み顯はす奇瑞氏神守護有大内の寶、盜取て所持する曲者腕を廻せと詰かくれば、破れかぶれと三郎が、寶を渡せと組付を、脇つばてうど真の當、早足々蹴上る疊の下、ひらりと飛込、手練の曲者、四方を圍んで召捕と番手を定る數多の捕人花檀築山廣庭をかり立く
かり立る早日も西も入海や、船路應護の嚴島前へ海水漫よとして實日の本よ三つの景詠よ飽ぬ風情也、神すゝしめの神樂歌、きねが鼓や吹すさぶ笛の、ひしきも玄んくと音も澄渡る夕暮時、浪間を潜り舌先より、顯へれ出る勅使の曲者、寶を口よ引くへへ、おどろの白髮四方へ乱し、さも物凄き老女の姿、心を配りあたりを詠め、年來望し勘合の印、是さへ有ば軍勢催促の心の儘、其上加藤出海とも又互に疑念をいだくやう、反間を用ひたれば真柴大内が軍へ治定、其虛を討バ大望成就、添や嬉しやと悦ぶ後、又観ふ捕人、曲者やらぬと突出す長柄、心得たりと身をかれし、

前後を拂ふて渡り合、多勢を屈せぬ手練の老女、秘術をつくしいどみあ
ふはげしき太刀風と切立られ、こりや叶ひぬと大勢に、一度よばつと逃
ちつたり、猶も心をくべる内、さまよひ出る以前の娘、姫君狼狽る所で
あい浦手へ廻れば相圖の筥舟、早ふくとせつかれても、心ひそやろ
氣はうろく、サア教への所へ行ふと思ふても、跡へ心が引されて、まつ
ともふぞふぞ、最一度さつきのお方よ、何をぐぞ、生捕れでは家の
恥早ふくよせひなくも、こけつまろびつ落て行續ひてあゆむうしろ
より、曲者捕たと取付捕人、海へべつさり切込で跡をら浪と失ふけり、始
終の様子廻廊の、かげよきし居るあやしの宮奴、老女が跡を打ながめ、今
のは慥よと胸よ納むる折こそ有いづくよりかへばらくと諸侯の
めんく立出て、久吉公の迎ひと供奉嚴重よそなはる智仁ゆふく
と寛仁大度の粧ひ、前後左右の騎羅ほしのかゞやく威勢高富氏旅館

をして「歸らる」

○三冊目

志よふならく、喧嘩けんかをせふなら、弱いやつがよいわさ、ぞめく小歌も虚きを
八百鉄炮組の惡者共、火蓋ひあわせの三又二つ玉、大道一ぱい肩肘かたひちをばりてみく
れすいがみ頬ほお直す直、渡らぬ錦帶橋きんたいばし、賣うり店てん、腰打こしだかけすつぼん屋や、夕べの
水くそふで喰くられあんだ、火蓋がいふ通り、水くそふていけなんだ、
今度の隨分はり込二膳ごぜん持もつて來られい、ハ水くそふてわるくべ、いつそこ
ついりよせふと、釜かまの下、炭がないやら煮いはかぬる、火吹竹やら杓子やら、取
違たがへたるわにて者、二人のしきげん味みそふな、早ふくはやくと近ちかがつゑ、出來
るや呑のや取くらい、是で算用さんよう志られいと投出なげししたるはした錢亭主せんていしゆへ取
上ふせうト、此間のも一所として壹貫八百、是で壹貫七百八十足あしま
せぬぬ、たらずバ何なんば有あふと皆かりと、あつい火蓋ひあわせが頬ほおの皮み見付つけたそぶ

り、こなたの煮賣屋、よらず障らずあゆみ寄すれ違ふたる身あんばい、煮
賣屋聲かけこれく、おれが事か、こなさんの事でござんす、何でありや、
太義だいぎながらわの錦帶橋の橋誥ばしゆくへ出て下はれいサマ橋誥へ來たが何であ
りや、や外の事でもない、跡の月の晦日の晩ばんよ、やらふと云んした蛸たこの代
テ今貰うけふかいうかい、何をぬかすぞい、借た物をついよ拂はらふた事ことがない、お
こせどぬかしや此通りと頭あたまびつゑやりたゝ喰れ、算用合あわせぬそろばん
構出入きりりゅつへこぢけた煮いうりや共、こりやたまらぬと遂ついて行ゆ、二つ玉、皆みな
げおつた間まよ何なにも角かくも喰くてこまそふかいうかい、忘うぶれた事、こりや天てんから
のおあてがい、うまいうまいくと、二人とも、そこらそこらがして鍋なべのふた、取なり
玉たまとふり袖そでの、袂そでもあまる色いろざかり、裾きしもほらく、あゆみ来る、お圓まんじゅう
を見る、跡先からさき姉あねさん、どこへいかんすおくろかへま、此二つ玉も
運うつまなうかへと、釣つりかけて見る戀こいのわなわな、めつそふな、私わたくしついそこな

氏神様へ、ナタ、其氏神込でゐる、大かた色事の願であろ、神様を頼まいでも
得心してゐるわれはどふじやへ、アル火蓋がいやあらわれよなど、私が心
がどゞいたら、すぐよお前を連ていぬ、返事はどふと兩方から、無理に引
はる其所へ、來かしる清介はしり寄、二人を取て突つきのくれべ、ナ清介かよ
い所へと、悦ぶおゑんは地獄じごくよて、佛ぼつよ逢し心なり、ヨリヤ二才め、何で邪魔じやま
うぐ、イヤ邪魔じやまへ致しませぬが、此娘めのわらわをどふなされます、ハテどふといふた
ら惚ほれたと因て、ナ二つ玉たま、二人して本得心ほんぞくしんよ堪納かななさすのぢや、ハテ夫めいめ
つそうといふ物、惚ほれたと思ふたらあつちからも惚ほれる様ようとするが色事で
ござります、成程そふでに有ふが、火蓋ひあわせおいらりついと母おやぢの方から、
アそこが秘密ひみつこんたん、何でも惚ほれさそふと思へば女の好すきへ持て行いが色
事いろの穴あな、此娘めのわらわはきつい身ぶりや踊おどりが、ナット皆迄といふな込こんである、ヨリヤ二つ
玉たま娘むすめのすくは雷子らいしや巴江はかまの板子いたこ出嶋でじまの桺色くわいろ所ところ、客き立派りょうぱ氣きはさつば

腰しぎしもんは、中よしのじふれた。顔おてよしあさい、夕べもこよ連だ
まはたの、踊おどり性根じやうねうてうてん、二人も此場をだまはたの、遙とおを覗くわひ逃にげて
行、踊仕おどりまふてそこらを見て、^四ヨリヤとふドふおれをだまはたの、憎にくいやつと
謐ちよく折から懷手いとのつさくと出来る種が島大藏大道しまだざう立たはだかり、最さい
前まへより此所へ大友殿おおともどの見みへあんだかと尋たずる向むかへ大友三郎おおともさんろう家來けら引連ひづれ
歩あるみくる夫おとこと見る大藏だざうへ、土つちと手てをつき散まきまきへば三郎さんろうあたりを見廻まわし、^四
先達せんたつて申付しんぶつた、其その方が家いえ傳つたへる火薬ほやくの秘書ひしょ、いよ／＼明日あした御念ごねん及およべ
べぬ、勘當かんとうえられても子こよ違たがひのない私わたくし、片意地かたのじいふても親おやぢの女の事こと、つ
い取とりますが、褒美ほめよひ違たがひなふ大名だいめいよ、^四望まねみさへ叶かなへば二ヶ國ふたヶくに
が三ヶ國みっヶくにでもくれるいざ、^四うまい、何なんを火蓋ひあわも二ツ玉たまもあれ聞きたか、
やもふいつそあらざや、時ときよこなんが大名だいめいよならんすと、男作おとつくりの游あそべが
むづかしい、下缺さか時繪ときゑよ頭巾かぶとの縫ぬいといかずい成なまい、それ火蓋ひあわの

ひふ通り、揮^{ふり}へ虎^{とら}の皮がよからふかい。頭^{かしら}、イヤナ三郎様、万事^{まことに}ハ明日此方
より、然らば手筈^{てはず}の違ひぬ様、上の關の野はづれ、家來を待せ返事を相待
必ず首尾よく、大藏さらば、おさらばと欲惡二ツ兩方へ、ひき別れてぞ急
行く、歸る道筋氣も夕陽^{せきよう}、おゑんが跡^{せき}、清助がいきせき歩^{ある}む向ふの方、の
さべり出る二人のわる者、見るよりおゑん清介も俱^{とも}驚く計あり、^{ヤイ}二
才めよふやりあがつたな、大かた此道と思ふた故、頭^{かしら}みちやらくにして
跡^{せき}へ戻つた。さつきの禮^{れい}をと、兩方^{ふたがた}、一度^{いちど}よかゝるを身をかゝし、左右
へとつぱり投^{なげ}られても、直^すと^り付我武者物^{もの}、おゑんが氣轉^{きそん}夷^{てん}うりやの、
茶釜^{ぢかま}を取^とて火蓋^{かぶた}が頭^{かしら}、手桶^{てい}をざんぶり二つ玉^{たま}、うろ付二人其隙^{そのま}、おゑ
んが手^てを取清介^{せいすけ}跡^{せき}をも見ずして「よげ歸^かる」

○四冊目

蝶花形

其比^{たゞ}絶^{たゞ}てなかりし鉄砲鍛冶^{かき}、井上何某^{なに}が後家娘夫^{むすめ}の譲り受繼^{うけつい}で、世渡

る業も、上の關店の諸方の注文などいだり磨く鐵砲も、手も放されぬいそがしさ汗をたらしく下職角兵衛アシガクヒサエ、左んどやく煙草たばこもせすと大方やり付たぞ、わいらも腰がめりくいふ、ヤセ何ぼめり付てもお圓様の顔はへ見ると、左んと左んとい事はない、夫よゐの子の名をおゑんといきつい間違ひ、いつでも顔見るとをへるのよ、又惡口ばつかり、嘆さんかうさんが聞て玄やぞへど、顔に赤らむ、紅葉レバのうつらふ色ぞ見まほしき、暖簾押上母、おきわコイハ皆の衆けふの仕業レバの急ぎ物、もふ出來あがりましたかの、竹磨タケガきり出來ましてござります、そんなら仕立仕立ていつもの通り、裏の細工場タナカ、そんなら左様と銘よみ鐵砲だかへ立て行、おゑんの母が傍よ寄アタマ、此間から軍が起ると此周防の國の大騒動、夫よつけとも便すべくない女の身の上、かてしくへた事ながら斯いふ折を幸よ、勘當なされた兄様を、又兄が事かいのふ、親の譲りの職シヨクをきらひ、鐵砲組の、ヤ種が島の

と異妙を付ての男達、あれが人間の所作かいのふ、思ひ出すも面白ない、此後ハ兄が事ぶつしりいふてもたまるなや、ほんよ夫ハそふと此清介ハ、御城下迄いきやつたが、連は戻りと母娘、見やる妻へ立歸る、此家の下人清助逆色もくつきり白嶋み、女の惱る當世男、清介ハ畏り、ハ今日の注文ハ此通でござりますと、さし出す書付手どる母娘ハ夫と嬉しさも飛立心を目で窺らす母の手前ぞ窺んきなる、秋月の屋敷が二百挺、菊地が三百挺、こりや鉄砲計玄やの、シテ其外又種が嶋廿挺、是も同じ屋敷の御注文、ヤハ夫ハそふと上方勢が國境迄攻入たど、九州の地ハきつい騒動でござります、ヤもふ何ば騒動しても、氣遣ひのなひ此放れ嶋、あつちは軍、こつちハ金設けの盃、あまりの遠しさ又ほつとりと草臥た、どりや此透み一寝入、そなたも休みやど、母親が立ハ娘の勝手口暖簾の内へ入みけり、おゑんの跡を打詠めアモアキつい粹な娘さん、二人を残して置玄やん

した、譯有中を知ての事か、いつそ様子を打明て、や、夫いふたらわたりおめあし、何の、母様^かよ限つてそんな心のないわいの、私より筆を取と云んした事も有、其様よいやるの、わがみへいやかや、めつそふな、何で私が、いやではないかへ、嬉し、そんあら斯と手を取て、懸^{どう}よおぼこ^か媚^かきて抱^{いだ}合たる、其折から、勘當の息子種^くが嶋大藏、大小いかつゝ差こわらし、仲間のわる者供^供々連案内もなくずつと入内^{いり}ぬ^び拘り飛のく二人、^二逃^げる事はない兄^の粹^{すい}じやく、そして母者の内^{うち}かう^う嘆^{うなづ}様^{よう}ハ奥^{おく}み玄^{くろ}やが兄さんおまへの其形^{かたち}へ、是かゑしゆすりで有ふかな、けふよりはお侍のちやきく、夫^の付て母者^の急用^{ききう}逢^あ來たの玄^{くろ}や、母者人^{ひと}と、家内^{いえ}よ響^{ひゞく}乙^{おつ}調聲^{ちうじょう}もれ聞てや母^の立出^{だきだし}つ、いよ見た事もないお侍、何の御用^{ごうよう}とそらさぬ顔^{おほほ}、また片意地^{かたむぢ}かい、けふ來たの無心^{むじん}で、ない、コレそつちの爲^{ため}の大豊年、其譯^いまあ斯^{この}玄^{くろ}や、きのふ大友様^{おほともよ}へ抱^{いだ}へら

れれつきとしたお侍、仲間の火蓋や二つ玉もあの通りで家來共と、
と畏る何とゑらいか、斯出世するよ付ての母者や妹を喰や喰すの職人
でハ置れまいと、終々ない慈悲の心が起つて來た故、こつちから丁簡付
て勘當赦されよ來てやつたのぢや、ナソふでもいか左様ともく、破れ
世帶を取置て、後室様よ奥様といひれて出世をなさるといふ物、ナ火ぶ
たよ、勘當請た母親の面倒を見てやると、近年の大孝行、綿屋そこの
けでござります、母者人聞てか、あの通りぢや、有がたいが、本得心か、嬉
しそふな顔付、玄やと口から出次第取じめもならず者との知れけり、母
は憫て高笑ひ、おどましや此ほ侍の氣違ひそうな笑止な事と、顔背け
相人よならねば娘のおゑん、夫ハ餘りお氣強い、侍又成たと有からハ、是
迄の心でも有まいとふぞ是から、そぞや何を云やる親の譲りの職を
嫌い外を家とする不孝者、勘當玄たれば他人と他人、すべて武士の武士

の道、町人の町人と其業よ疎ひ物の人にすたり物、天も覆ひず、地も是をのせすとやらん今でも職人よなる心あら勘當赦すまい物でもない、道よ背いた侍顔見るも淺まし穢らひしと、誠をせめし母親の異見を聞よ清介が、我身よこたへ骨よ志み不孝を悔む忍び泣大藏の大あくび、そんな志ゆんだ事聞よひこねりい勘當赦さねばそつちの損しけふ爰へ來た火薬の秘書がほしい計、ナ出して貰ふ出して下あれい、ナそんな物へ持てないぬぞ、隠さんすな、親父から傳へつた地雷の法、知ぬいてゐる此大藏、主人大友の懸望首尾よふいたら大名よなるしろ物、出世の種玄や、出したく、出さねばいつそ手短よ家搜すると二人よ目くばせ身がまへし、奥をめがけてかけ入屹相、驚く二人騒がぬおきハヨレ職人衆さつきよ云付て置た通り、早ふくといふ聲よ裏かてん手よ下職共鐵炮引提走り出、筒先そろへて取巻たり、女と思ひ侮つて奥へと有べぬ

好みの鐵炮組、念を入れての二ッ玉、めつそな、いかよ商賣柄玄や迎、斯澤山々鐵炮をもて扱ふてよい物か、ナ火蓋よ二ッ玉よ、誰ぞ逝まいといふふござれ、おいらもとふから逝たふて、尻がもじく氣ももじく、重てから足切込と何時でも此通り、皆の衆、後へ戻れば面倒などふでいぬ道野はづれ迄、送つてやつて下されい、左様ふならわたらしらハ直みか暇申ます、太義でござつた、あしたの仕事も急ぎ物、贋分早ふよ、かじこま畏りました、チャ息子殿歩ま玄やれ、けつたいな行はれチャと付廻され、我身アタマある鐵炮組、む玄やく玄や腹の立場立場ばへつぶやきて「こそ出て行跡ヒツと大水の出し假令や獨り江の水よよるべのつきほさへ挨拶あいさつすまぬ、二人が心見て取母カモの思案を極め、二人共爰へお玄や清介そなたのふんと不義イキキ云交かはしていやらふがの、ヒカ呼シカるでれない譯有中を幸さわら、聟カウ成カウて貰モラいたい、スリヤ不義のふ呵シカりもなふ、ア女夫

よして下さんすかへ、互好あふ若いどし、得心有ば夫婦の盃押付業
も清介をよし有る武士の胤と見た故、縁を結んだ其上で頼たい事、コレ頼
まれて下されど、様子有げな詞のはらのつびきならず言かけられ、ヨレ
に推量の上り包みよ及べず、成程私武士の果様子よよつて頼まれませ
ふが、シテ其子細ハ嬉びざる、忝い児ハ元より妹も是迄包し氏系圖、夫ハ
井上新左工門逆大内嶋の冠者の家臣、南蠻の傳を以て、始て鐵炮を作り
主人へ獻上、隣國の大友より鐵炮を頻りの懇望、あたへざるを憤り不意
よ押寄夫の最期、其後爰よかくれ住子供を養育時節を待、夫の仇を報は
んと思へ共児ハ不所存者一人ハかよひき女の事、頼みといふは敵の血
筋大友三郎、上方勢の先駆玄て古主大内と戦ふ最中、こあたを古主へ味
方させ、大友を討夫の恨晴させて貰ひたさ、筈又望むも此入譯得心玄て
下さるか、ティ其義は、不得心か、サア夫はサアの詞詰返答、何と清介が望有身

の當惑^{どうけつ}より暫^{しば}し、詞もなき折から、表^{ひらめ}より數多^{あまた}の供廻り、前後を圍ふ鉢^{ひばち}乗物門口^{かまくら}より昇居^{あが}れば近習の侍手をつかへ、井上氏の貴宅^{きたく}は是かな、案内^{あんない}と音なふ聲^{こゑ}、とめ木の音も、志^しとやかみ云はねど、夫と高家の奥方、乗物出る禮姿^{れいし}思はず見やる清介^{きよすけ}が、ア姉上かと云んどせしが身を顧て扣ゆる体見向もやらず、志づくと母が手を取上座^{あがくわ}より直し、押下れば、こなたにものじり、ヤ^ア見ぐるしき垣生^{あはらや}へ、何御用かしらね共懲懃^{いんぎん}なあ志らひ、^ヤひらみ是へと立上るが左様^{さざな}よおつしやる者でなし私事は加藤虎之助正清^{まさきよ}が奥葉末^{はは}と^ア者、又あれぬる、清介事は自^{みづか}が眞實^{まこと}の弟、其義^{よし}と付密^{ひつ}みお頼^ア子細^{しざい}有て、はるべく是迄參りしと、聞いて拘り^{まつ}、そんならあなたは久吉方、正清様の奥様かと、親子が驚き、戀^らの素性^{すきやう}も嘸^{まご}と、鞠る^う計娘は道^{みち}あどなくも、^{アモ}結構^{けうちゅう}な姉^{あね}、よふこそお出と茶を汲^くやら、榎^{えのき}でえゆかの追從^{つづ}み、二人が戀は見へみけり、是はア思ひがけあい清介が身の

上、其又姉ひながお頼のぞひな、アヤ餘あまごの儀ぎでもなく弟わいが身みの上うへ、親おやぢの不興ふきょうよ志しべしの國遠くにとおん、其後行衛こうえいを尋たずねし、此家このいえ又奉公ほうこういたす由ゆ、聞きと早速はやそく參さんりし、弟わいを連歸つれかへり親おやぢの勘當かんとう赦ゆるさせ度ど、何率なんざつ只今ただいまお暇ひまをと、云いならべたる詞ことの先折さきつり申葉末はなすゑとやら、其事ことならば成なませぬと、譯わけア清介きよすけ、下人げじんではない娘むすめが聾ろうがね、夫おとこ又隙ひまにやられませぬ、とふおつしやれば角かどが立たつたとへ弟わいが契約けいやくせふが、此姉ひなが不得心ふしこころ、約束やくそく返改へんがい女房めらこを去はなぶて戻もどるも男おとこのかうけ、エ、ア、コレ娘御心むすめごじん強いと思おもやらふが連歸つれかへらねば埋木うもくと朽果くわうる弟わいが不便ふびんさ、キそりやあなたの勝手かつてバつかり、たとへ娘むすめが縁えんに切きても、清介きよすけの年としの中なか、證文あての有ある其中うち極きわめの奉公ほうこう勧すすめ、大名だいめいの御威光ごひきうでも、國くにの捷わざに背そむかれまい何なんとくと理りの當然ぜんぜんかへす詞こともなよ竹たけの、葉末はなすゑの夫おとこと心得おもて、家來けらゐを招まねき用意ようびの何か白臺しらだいを、おきいが前まへより直たださせ、些すこ少すくながら此金子こひきん、清介きよすけが奉公ほうこうの年としを償つくふ三百両さんびしろ、キ猶以よて成なませぬ、職人しょくにんと侮あざつて、金銀きんぎんを

あつてのふし付業、お大名又は似合ぬさも玄い仕方相手なる隙がない、とつと持つてお歸りと、突出す白臺山吹色落花狼藉あらけなく納戸の内へ入跡へ、どふ納るか白臺を取直さする姉が氣みいづれと分て身よかしる血脉の難義とやかくと、思ひついけて立上り見廻すこなたの種が島、取上で打詠め稀なる武器の最上なれ共、内よ魂なき時へ、火薬の玄るしも能なき鐵炮、元の武士又立歸るか、此家で朽果るか的はそなたの心の火蓋、切て歸るか、歸らぬか、工夫を仕やと弟へ、姉が心の口華残して奥へ入跡へ、恩と義理との二ツ玉ばたと我身よ行當る、思案の体又おゑんへ摺寄すりよせ、おまへ姉様の詞又付、いぬる心でござんすかへ、コイア俯うつぶいてべつかいで物いは玄やんせぬ、女夫めうよ成ないいやかいな、ほん又思へば耻はずしい、此家へ見へた其日より目元のはりのきつとして、立居物たちものごし爪つまはづれ、よし有人と思ひそめニ世も三世もかへらむと契ちぎ

りし事も皆いたづら、あの奥様が姉嫁なら、あなたに志れたは大名憶た
といふも勿体あい譬ていひい高根の花、賤しい此身とあきらめても、思
ひ切れぬ懸路の因果、おまへよ別れ片時も生てゐるほど取付て、恨の道
も一筋き娘心ぞいちらしき清介はもくねんと、暫し詞もなかりしが、
是迄段々そなたの深切、禮の詞よ盡されず、去ながら此入譯とつくりと
聞てたも、姉よもせよ女の推舉よ、勘當を赦されて、某が武士道立す、又
とゞまれば親への不孝、闇よ迷ふ此身の上、然るゝ幸久吉公、當國出馬の
先陣よ加へり、高名手柄をあらわして、元の武士よ返りし上、表向よ助太
刀して大友を討取り、母の頼みも立道理、夫を功よ勘當の説せん物と思
へ共、今落ぶれし素肌武者、武具もあければ叶へぬ望、武運よ盡し身の覺
悟、武士よもあらず町人の死耻ともならぬやう、今姉上が給へりし此種
が島が我身のどゝめ、どゝいふ物の由緒有武士の伴が、やみくくと大

死するが口惜い、おゑんさらばと立上の裾すそみすがつて、コレ武具調アシテへる
金が有有、何なんとサ姉様か母様へ、申上たら調へ共、夫アシテおまへの心が立
まい、外スルよわたしが心あてコト、早ハヤまつて下さんすなと、あてなき詞ハガキも身フ
かへて、夫思ひの眞實シンジツ、不便ふびんとも又ハシモいぢらしムカシ、武具調アシテへる金ヒ百兩
誠ハシモ思ハシモね共暫ヒラタクしの猶豫ヨウヨウ、そなたへ禮、暮六シズ迄ヨリ合點ハツヂか、アシテ命ハシメよか
へても持ヒラタクへます、どへいへ日脚ヒマツも七セブン過ハサウエ、一時イチヒたしぬ其内ヒナタよ、もしも出来
ずハシモ暮六シズの鐘カニを相圖アシツ、鉄炮腹テバウ、コレ短氣クダシキを出して下さんすなへ、此筒音
が互ハシモの別れ、さらばと計見カニす目ヒ、雨ハリか涕ハラハラの種ヒメが鳴、火繩ヒノロも玄ハシメるや
れ障子明ハシメて一間イチケンへ入ハシメ、跡ハシメおゑんハシメうつとりと胸ハシメ幾瀬ハシメの物思
ひ、暮六シズ迄ヨリ請合ハシメたが、百兩ヒサツと云金ヒメが、どふして出來ハシメるあだてもあし、一
寸ハシメ遁ハシメれもお前の命ハシメが延ハシメしたさ、嘘ハシメもやつぱりいそしは故ハシメ命ハシメで金ヒメが買ハシメへ
るなら、譬ハシメ此身ハシメすだく、よ刻ハシメまれても金ヒメがほしい、夫アシテの命ハシメが助けたい、

段々日脚も傾く空、こりやまあとふせふぐと、立たり居たり狂氣の如く泣入絶入るたりける。其金おれがかしてやろと、ぬつと出て来る納戸口、アおまへ兄さん、コヤ聲が高い裏口より忍び込様子を聞べ手詰のなんぎ、金かしてやる其かたり、火薬の秘書ひしょを盜んでこい。エと金ねいらぬかア夫ハいやかサくくとふざやと難題あんたいも、いやと云れぬ暮六つ前ムツ成程盜んで上ませふが其詞ちがよ違ひたがないかへタシ知た事人の見ぬ内早ふく、タカ慥たか有所ありの鎮守ちんじゆの内、勿躊躇むちよない事あがら、夫の命みことやかへられぬキ、そふ玄やくと帶引ばいひきえめ、夫思おもひの一か心こころよ神かみも歎ゆるして給さへれどかよりき足あしを踏ふえめく、歩あるみ寄よぢ念ねんなふ銃じゆう前まへ捻ねぢちぎり、扉明ひびらめればこれいかよ、秘書ひしょよハあらで火薬はげの丸まるがせ、兄ハ見るタ、コヤ炮焰ぱうえん火ひの玄かけ玉げん、是ハ有リても秘書ひしょがなけれバ、ごくよハ立たぬ、どふドブでも秘書ひしょの母はは者じやめが懷いだいつそ奥ハシマへと欠行けんこうをト、どシむるをゑんミ、邪魔じやまひろがすとそこ放ハシマ

せど、争ふ折しも撞出す暮六つ、わの鐘の暮六つ、夫の生死と見やる
一間よけふり立とふと響きし鉄炮よ、おゑんの思はず倒れ伏わつと計
よ伏沈み正脉涙計なり、思ひ定て起上り、鉄炮の夫の最期私も俱まと
いふを早く兄が指添取間あく咽みがれと突立つれば、兄の驚き、おゑ
んよ早まつた事してくれたなと悔めべおゑんの顔ふり上、
が自害のかくごの前、可愛い夫を先立て何の生てぬられふぞ、わたしが
死れべ子といふて、お前ひとりの事なれば、その惡どうな心を入かへ
是からどふぞ嘆さんへ、孝行頼み上ますと、いふもぐるしき息づかい、兄
の涙の聲を上、哥妹よ、おれへどふから善人よ成てゐるひいやい、最前
秘書を奪へんと、忍びて聞べ大友の父の敵と志らずして、一旦主人と頼
め共恩を請ねば義理もなし、今日よりれ亡父が名をつぎ、井上新左衛門
と改め、舊主よ仕ゆる我本心、母よ語つて望の秘書、ヲ請んど思へ共、一應

で渡されまじと心よ思ひぬ偽りも主人へ盡す忠義ぞと悪よも強き種が島大善心の勇士なり。でか志た其本心を聞たる母が悦びといふ驚き立かしり、納戸の障子押開けべ、手下の火蓋を突留て、其身も手負の母おきねぐれ大藏、最前の惡者共裏口を忍び込此如く手をおほせ、秘書を奪取立退しと、聞よりも氣へ動轉、それ取れてハ一大事いでばつ付て取返さんと、せきよせいてかけ出せば、こなたの一間よ聲高く、大内二代の忠臣、種が嶋を改名せし井上新左衛門元晴よ小坂部和三郎見参せんと、呼ひつて、立てる清介が姿貌も引かへて甲冑よ身をかため鐵炮引提欣然と葉末諸共居ならべ、新左衛門不審顔切腹と思ひの外汝が其形、スリヤ最前の鐵炮へ、夫こそ汝が母よ手を負せ、秘書をばい取逃行曲者、討留たりし鉄炮を、我最期ぞと思ひ詰、不便のおゑんが有様と見やれば葉末も涙よくれ、いどしの人の身の果やと悔めバ手負は息をつき、同

最期と思ひ結早まつたわたしが自害、ああたが此世よひざるあら冥途
の道をあゆみ兼迷ふわいなと聲をあげ、歎けべ母へ這寄て道理じや
く、是が迷ひでなろかいのふ、先だと思ふ其人へ此世よ殘つてゐやる
物、何と冥途へ行れふぞ、思へば此母が淺手がけつくらめ志い、せ
めてハ母様の、ふ命懲ないのが嬉しい、何のいのふ、死る程なる深手なら、
迷ひぬやう、諸共、三途の川を手を引て渡らふ物を可愛や、老の悔
みの數々、親子が涙紅ひの血沙わやなす計なり、哀れをよそ、新左衛
門、涙拂ふてつゝ立上り、ア久吉方の小坂部信卿眼前敵を置あがら此儘
とてハ歸られまい、ござこい勝負とひしめけば、よいふよや及ぶ縁内
證敵と敵、某が手練の程受て見よといふより早く、はつしと打べゑつか
と受留手練の井上小坂部重ねて、夫こそハ火薬の秘書、某が手よいれど
汝へ返すハ母への義理、領掌有と聞より早く、秘書の一卷押ひちき讀で

へうなづく心の會得、ば、ば、兼て望みし地雷の法、ほうろく火の仕かけ迄
委細々記せし此一巻、我手よ入べ一時の大功、悦びいざむ其所へ、あまた
の軍卒かけ來り、ヤ大藏の比興者相圖を違へ主人を背き大内へ味方の
返り忠遁(のが)さぬやらぬとおつとり卷、新左衛門打わらひ、ま、返り忠とい
案外なり、古主よ仕る新左衛門、手柄始め軍の手始め命ねくさる大友勢
火薬の試み幸ど、以前の丸がせ取出し、かしこへ投れば、忽ちよ、大地ハ一
面炮烙(めんぱろう)火あつと叫んで軍兵共皆一同よ倒れ伏(たふ)、バ氣味よし／＼心地よ
し、始て知たる火薬の妙、地雷を以て久吉よ泡吹せん、手裏(しゆり)有、汝が首
も其時よ取て得さずと、軍の廣言、汝が首(しやう)此小坂部勝負(したがひ)、互よ戰場
と表(あらわ)を立る、勇者と勇者娘(ゆうしゃ)今を斷末魔、いたへる母親姉葉末、此家を出
る歸國の道、冥途の旅と戰場と、三ツよ別る、三惡道、心よ「出て行

○五冊目

岩國いわくにより地名じめいも高き小瀬川筋おのせがね、天地あまぢやより響く鯨波くじらのなみ、兩陣初度りょうぢはつどの戰ひも軍破れ
て大内勢おほうちぜい思ひおもひくよ落集おちあつまりあつま兵内無事ひんないむじと有たか、惣右仰そうえうぎょう介けがあい
かかくくけふの軍ぐんの何なんと思ふ、國始こころしつて圖ずのない負ひやう、口惜くちくさい事ことではな
いかいか、小瀬川おのせがわを隔へだてし先手さかしのやつらを打うすくめ、十分味方みわがたの勝かつで有た
よ、何なんとして斯成このへなたぞい、我達われたつは志しらないな、頃日このごろ噂うわざの兒嶋こじま元兵衛もとひょうゑ、上の
瀬せを渡わたし、横館よこやか又辟易へきえきしての此こきまさ、年としよも似合にあはぬ手てひどひ智惠ちゑなや
つでではないか、智惠計ちゑきでない、其館そのやか先さきのえらさ、此後兒嶋こじまと見るならば、
必用心ひそかにしたがよい、塙明はらあきらぬ事こといふな、仁木ひとき家老けんろう、武者ぶしゃ之介のすけ様さま、長なが老人おじいさん
してござつたれど、歸參きりさんが叶かなつて、見みよ、向むかふの陣所じんしょとござれば、兒嶋こじま
でも大嶋おおじまでも、出合しゆあたら一つまみだ併あわせ負嫌ひきげいの仁木ひとき様さま、此儘これままででいいなれ
まい、勝軍かちぐさ又拔ぬけがけして、追おくるやつらを一人ひとりでも、首くびを取とねば國くにの恥はず、尤尤めかるな早急いそげと、喧嘩けんか過すぎての防ぼう州しゅう勢せい、小瀬川おのせがわとして引ひかへす、仁木ひときが家來けらゐ

岩田左太夫、六十餘りの老人引連、陣外遙々歩み出、あたり見廻し、小聲よ成拙者へ是よては別れや、密事の様子へ存せね共、彌主人が頼みの一義を、^{ハテ}お氣づかひなされますな、は領分ハセ、住私、殊々あの太切よ存するは方のいひしやる事、何の如才がござりませふ、然らばは苦勞、おさらばと、立別れんとする所へ、以前の軍兵といやく、土民を見へし角前髪、高手よいましめ引立るを、左太夫見るを、詞をかけ、軍兵共、若輩者も繩かけしり、子細有てか何事と尋ハナシ、皆も出かし顔、此ぞゑらい軍場の跡、ようろつく前髪ハゲめ、何でも敵の廻し者も極つた、夫故斯の仕合と、口もいへば件の繩付ハシメ、只今もや通り、うろんな物、玄やござりませぬ、此國の西嶋門戸兵衛といふ方へ尋て参るよ違ひいあい、どふぞお赦ヨロし下されと、ふうくしたる云譯ハナシを、傍からつくぐ、聞取親仁ヒジ、若い人其西嶋の門戸兵衛へば、とふいふ由縁で何の用、其譯ハナシをいふたがよい、何を隠そふ私

ハ元次とすて、其門戸兵衛が實の慄でござります、六つの年備前の國へ
養子よいて、其後音信不通なれど、此度内を退出され、便らふ方へ實親を
尋て参る道筋で、かゝる繩目のなんぎするも、不孝つくした親の罰、ほめ
んくと泣涙落あふ縁の門戸兵衛^ハ、そんならそちが我子の元次か、門
戸兵衛のふれ玄やひやい顔見せいと、取付て、^チ稚顔^{おさながほ}そふ玄やくミ
何より無事で嬉しいと、繩目^{まきめ}よかかる血脉^{ちあせ}迎、互の涙睦じし、左太夫手を
打^ハ拔^ハ貴殿の子息^{こしや}よなシ繩^{まき}とけと、下知すれば、むだ骨折た軍兵共、手持
あしくもゆるめる繩目門戸兵衛手をつかへ、^ハ聞の通り慄^えよ相違ない
上り、^トふぞふ歎^{やる}し下さりませ、何が扱^ハ疑念^{ねん}ハない連立^{つれだて}歸^かられよ、併し
又途中の氣づかひ、村境^{さかい}迄軍兵共、送つて参れよ惣^{まつ}が、取違へたこと分
え、道^と道^とやかよはやして行ふ^ヤけふの軍^よ負腹立て、何ても手柄^{てがら}
しめ付た、繩^わさへ違ふた左^{ひだり}まへ右の通りの詫言^{わびごと}よ、送つてすますが鎧武^{よろひむ}

者、ヨイバくよい折からゝ親と子が、名乗合たる小瀬川の、水の流や、人の身の縁より、連立「歸りける

○六冊目

周防長門の、浦境名よ大島の西東爰の西嶋西方のなむ、あみだ佛せふらかす、在所質氣の門戸兵衛、有がたや共家名せり、佛事仕まふて平僧のかき込茶漬端近よ、大あぐらしてぐれつさく、給仕人の娘のお食在所料理でお口より合まいけれど、よふあがつて下さりませ、トニヤハナシ獵師の内と樂しんだみ、いけもせぬ精進物で、やうく茶漬七八杯仕まいの付ぬ腹鹽梅モリ膳取て下されど、箸投捨てば、主の庭又ないかけた、繩も玄つかり達者作り、何と云ふやる、扱ひこなたれ、精進嫌いかず、寺ゐる時へ、一向一心がすゝる故、けんよもない顔してゐれど、何よ寄す喰たい物い、遁さぬ所できかん坊、併し、親父殿、醒物が一つもなふて今夜の事のが

とふさつゑやる、今夜の事とい何の事、物覺のわるい咄して置た聾
の事玄や、夫忘れてよい物か精進日で海山とも商賣へ休んだが其心當
り玄て置た。^謂よしく、期いふ内へ聾入するも何やらこなたよ頼たい
と望でくる上^ノ聾、心當といひ玄やるのでどふやら咽がこそぼふ成
た、晚迄待す其聾を今から逝で連てくる、何も手廻し親父殿、料理持へし
て置玄やれ、レ濱焼^謂古いぞや、たつぶり芥子^謂刺身がよから、吸物なら
バ西嶋の鮓汁^謂が名物玄やと獨呑込ぬらくら坊主出て行隙^謂を待兼て、や
簫さん聾を入れと云玄やんすい、誰が聾でござんすへ、忘れた事我が
聾玄や、尤よし有浪人迎去^謂年冬から、こちの内へ來た五郎作、縁でか
な聾^謂取て我と女夫^謂として置たが又跡月國元へ、ちよつと返して下さ
れど、出でいたなりよ置去同然^謂是でハ濟ぬと思ふ内、お坊の世話でこち
の聾^謂よ望んで來る上方者、相談^謂玄めて何角なしよ、けふ連て來る簫玄や、

と聞てはつとい思ひながら、アソビさんわつけもあり、何ぼふ音信ない迎も漸^{やうへみ}三月立や立す、どふまあ男が持れる物か、やめよして下さんせ、
一^{一回}段^{だん}と寄年^{よる}と我計では便^{たより}がない、其便り^{ゆき}、ダベから戻つてゐる、
弟の元次、旅勞^{たびづなれ}で休まして置たれど、いやといふわたしが無理か、起して
来て相談^{さうだん}せふと立上るを、是^{これ}扱、弟めの幼少^{よし}から侍^{まつ}成たるか故、備前
の郷士^{ごうじ}へ所望せられてやつた懃^{こころ}、乞^{こね}うおつて戻つて來ても、三つ^よ付た
癖^{くせ}は百迄^{ひゃくごく}、便り^{びんり}みなうやら成まいやら^{なま}まだやつぱり聞分^{き、わかれ}ない、モリ云出
して下さんすなど、つんと背ける門の口、内の様子^{つき}かん坊、墨の衣も
取ていけ、横すじかいよ、麻袴^{あさばかま}來たぞや〜〜、花聾^{はなぢ}を連て來たか、顔見せ
ぬ内持參^{しきん}の敷金、ゑら玄や^いいのふ〜〜、皆の衆、すつと内へ頼みます、
ゑら玄や^い大事じやと、わらく間^ま、人歩^{ひとあゆみ}が持込千兩箱、間狭^{せま}き庭^{にわ}みみ
ちのくの、黃^こ金花咲寶^{がね}の山、門戸^{もんと}兵衛^{ひょうえ}ぎよつとし、是^{これ}又どめつそふ^{そふ}と持

込だか此箱は皆金か知た事、ゑらじやひいのふく、十箱で丁と一万兩
愚僧も歩一の千兩をせしめたら還俗して花やる心、あたまの跡へ廻
し、麻上下の仲人役、是がほんまの三國一智と取濟だ顔で、親父隨分奢ら
しやれど、いきり切たる坊主天窓もたへのない、年寄質氣、ふ坊深切ぶ
りへ添いが御本山へ上るやつじやうよ金出ししあがら悦んで、こんな内へ来る
智なら何でもろくなやつじや有まい、とつくりと糺した上と、尻へ
手の廻り氣のもつけの幸とさんそふじやひいな、盜人か海賊か、跡
の捌けがむづかしいきりく持ていあしやんせ、と何がな逝したがる
女房、譯もなし此金よ尻宮の禁中様でも來す事なぬ、智がわせて名
を聞たら、惄りして目を廻さぬ様、氣付の用意もして置しやれ、そこへ
智殿じやと立たり、ゐたり出つ入つ、譯白妙の濱傳ひ、先手の「行列あり込
る、其勢ひ泰山のわき狹箱、輝く金紋さり鎮めたる雨が下、持筒持弓引

馬も万里よ羽うつ大鳥毛、風も長刀、枝をならさぬ、松の木の下驛より今
ハ大樹の徳高き、乗物出る大領久吉、名乘ぬ先よ氣を呑れ親子ハ、鞠れ詞
なし、近習小姓ハ戸外よ残し通り給へべきかん坊、何と肝がひしやげる
か、智といふハ久吉様冥加よ叶ふた嫁舅、氣遣ひなしよ歩一の外、勧き代
の御再興志、草ふくと慾頬坊主、だまらしやれ、御大身の久吉様が、獵師
の智よ成たいどり、外よ様子の有そな事、呑込ぬ縁組、こつちから變改
します、娘も得心せぬから、連立て逝しやれと、けんもほろしよ雛子と
麿恐れ氣もなき、むくつけ親仁、利慾よ迷ひぬ門戸兵衛、推量よ違はず、
頼入度四海の大事、此度當國大内家と、屢合戰利有といへ共要害堅固の
岩國山、本城への間道、有よし絶所の案内頼まん爲わざく、是迄來つた
リ、成程其拔道を知た者ハ猪猿の外國中よ、今一人とない此親仁、夫を習
ふて大内家を瀆して玄まふ心であろう、イヤ左よあらず、本道も責詰なべ、爾

家の死亡すくなからず、智計を以て歸伏させ、名家を長く立置心底必疑ふ事なけれど、仁慈の仰み、お傍附お受くと有けれど、此國を切取ふと間み合嘘の此親父が、元あたまより移つて有夫とも、四梅の爲と云ふやるが誠なら、物習ふよい法の有物、大將風取置て、見事習ふて見やしやるかと、一理屈有詞のはし、尤とや思しけん、皆の者心よ叶ひぬ金子を取持手廻りの外へ船中へと遙々遠ざけ久吉公つかくと庭より畏り、何事よりらず教るハ師匠、習ふからハ弟子分の奉公人遣ふて見て下さりませ、ハ夫でちつとい誠らしげ、こつちの内よ遣ふからハ米も踏だり木も割たり、それ合點なら遣ふて見よ、と様めつそな、あなたれ今誰有ふハア大事ないあわろも元成上り玄やれい、ちいさい時より子傳したり味噌こし提て走つたり下主仕事ハ苦よも成まい幸よないかけて置た其繩、目見へよやつてくれぬかい、何が拵安い事、五十尋や百尋ハ

つい朝腹と尻軽じりがる、取て手品も下主近しもぢかふ、塵じんよまじまじひる薬仕事坊主やくしごうの傍わきよ伸び欠あきび、レくきほいからこつた敷金ひきんの元もとの鞆反ともそむきの合あぬない愚僧ぐそう一人せめて一ぱい親仁殿おやじにんでん、ヨリヤ道理ごり志しや、娘むすめよ酒屋さけやへ一走はしり、アくと立たお倉くらツト待まてい虫むしがきかん坊ぼう、おれがかひつて徳利とくりど、道みち口くちからあて呑のみ咽のをならして、出て行いきせるくへへて門戸兵衛もんとひょうえ、よつ程下お地じが有あかして、薬やくのこなしこなしが味あい物ものじや、昔むかの業わざをさすに付つ、一飛ひとぶの立身出世だいしゆしゆ、シテ何なにから仕出しうしだぞいの、さればこそ、因果物語いざいものがたりりをふ尋たずね仕業じぎょう仕しながらかいつまんまんでふ嘲ほのめしやそ、小性共湯こせうきょうとうを一つひとつ、と用意よういを白銀しらぎんの器うつわ、立たる臺子だいしの泌なまめ、おつ取とてがぶくく、蚤いたの息いきよへ天上あめすれば、男おとこの氣きでくへ、生うれ付つてちいさい事が大嫌だいかいい、口くちから出で次つぎ第だいいふ事ことも、一つひとつ拍子ひやうしが向むかて來くると、我わも立ちぬ運うんが手て傳つたひ、雨あめが下くだといふ大身だいしん代だい持もつて見ての其術じゆなな、シテすがつたのもちつたれと、訴うそへて來くる度たび、四六五六又分わけねばならずす、今年ことの豊年とよねか。

凶年か、米が高いへ安い迄、案じて見る。其日過と同じ身の上、町人が笑へば、武家がふくれる。在がよければ又こちらと思ふ様よりならぬ世界、なふくいやの天下取、按摩取よりも成たいと明暮願ふておりました。いか様コリヤそふも有ふ、そんならやつぱり樂しみに夕顔棚の下涼か、なふて事足身こそ安けれど、一ぶく仕つらふ心得小性が、たばこ盈さへ目八分、長いきせるの上もなき煙りくらべの富士浅間、お倉の始終もじくと氣の軽いお方なれど仰山なあのお姿すがたほんほんよあア奥へ建立はり込で、おれ、着きがへの古布子、着せかへてやつてくれシヤ有がたい、久しうりの洗濯物、お辭義なしより請ふう、勝手見かつてみがてら休んでお玄や、小性共の當家を放れ、休足いたせ、後程お目めまかしりま志しよと、上と下とのわけ隔へだてぞぐいぬ薬屋くわやみ、長椅はなまきの裾引別れ、入給ふ、跡あとひ一人佛檯ぶつだいの扉押明びひらぶつくと、夕時の勤終る頃、お倉の心も心ならず、やどり様が我わを立拔て久

吉様を、留さ玄やんしたお前の心、間道とやらを教へる氣か、但し例外
思案でも、有ての事かとうらどへば、そぞや心底を見届けた上、どふせう
と儘な事は悪ふござんせう、に領分に住む前、殊よ夫の身の上ひま、今大
内家へ歸参して、仁木武者之介と云ふがあ、それ知ながら拔道をおし
へる心でござんすな、日本一の久吉殿、下主仕業の奉公も、下を憐む名
大將相人よ取いあぶな物、こちの内よ留て置い國の爲蠶が爲玄や、こ裏
へいて大將よ、米なりと踏してこふと、提くらべせし煙草盈脇へ押やり
入跡を見送る目さへ涙ぐみたる、女氣も案じよくれの兼てより、夫を仁
木武者の助と、本名知てどもさんが今の口ぶり敵方へ拔道を教る心ひ
やつぱり懲か、但し武家よ望有、弟が出世を願ふてか何よもせよ此事
を、夫へ告んとかけ出せしが、くちからした上で惜いやつと、たつた一人
のとし様を、國の仕置レされた事親の訴人よ行も同然、こちらも大切、あ

ちらも大事、兎も角とも睦じうして下さるが親の慈悲、中立身の悲しさを思ひ、やりあき胴慾と、親と夫の二道より迷ふ心ぞいぢらしき、時分を窺ふ弟元次直も生立竹藪を手頃に切たるひとつそぎ館奥を目がけてよらんとす。姉の驚きに弟勢ひ込でござとこへシ音高し姉者人幼少より武門を望み、上方にて主取せし亡君明智の敵久吉恨を返す此竹館、されば大内の國恩も俱く報する今此時そこ退給へと血氣の若者、其心を聞上り、女ながらも夫の名代國も仇する眞柴大領餘しにせじと、かいぐ數も身辯へせくまい婦人心得しと忍び寄たる一間の内、人影目當も突込竹鎗切取手ごたへ仕損せしと蹴放す障子の内より爺親思ひがけあき兄弟の誤り入て跡玄さり、親のほれく何氣もなふ漸々ベ戻つた弟海山かけての獵師商賣、玄らず居ての口が干上る、其繩爰へ持てこい、マ山の案内から、歌へて置ふと差圖して、姉が持た繩の端、東の

尾崎を入込んでそふ、斯西へ引廻した、二間計が十四五丁、見上る様な石のかへり、横槌を上々置、其石を左へ取、樹木茂つた谷間を十丁計、此様側へ上る様な切岸、高い岩山を、木の根よすがつて、よぢ登れば、數居の流れ小瀬川の、上を渡つて又爰より、數百間よあまる大岩、煙草盆印（詞）付し枝折を尋、右へ廻つて高山を、上りつ下りつ、凡道法貳百丁、岩國の本城へ急げ急げと云けれど、（詞）数ひ、山口の間道とな、兩人矢猛（詞）よはやる共、いかなく討れぬ大將、今おしへた間道より武者の助を手引して、久吉が首討（詞）そふ爲事よかこつけ留置たも、聾（詞）よ手柄がさせない計、今宵の中よど持たる一腰投出せば元次（詞）、はつと押戴（詞）きく有難きに本心、是こそ主人よ受たる感狀、我身の姓名成行迄、一書よくへしく認め置、事急なればと取出す一封、取つぐ姉、難所の夜道怪我せぬ様、心得用意の陣松明道を照してかけり行親もぞくく、後影我子ながらも生れ勝つたりしいや

つ。此感狀、又姓名どひ、何と名を付ふつたと、親子の行燈引寄て、國を出る時、親兄弟を忘るゝよりあらね共、弓矢の義理の私ならず、ハチむづかしう書置たな、明智の殘黨とやう偽り、誠の養父の古主、隨ひ、久吉公の下知よよつて、間道を聞取ば、是を功よ大内家と和睦の願ひ、國よ仇して國を助け不幸よ似て幸を立る和睦の神文體よ御落手下され度候、親人様へ、兒島元兵衛政次と、讀度よみ親子が驚きけ扱ひ頃日名よ高き兒島元兵衛といふ若者は、卒元次で、有たよな、久しうりで戻りやつたり、間道を習ふ爲か、と、様娘、娘、ハアはつと鞠れてとふと座し、玄バシ詞もあき折から、始終見届け久吉公、欣然と立出給ひ、仁木又縁有門戸兵衛、一應でハ敵へぬ間道聞取方便の兒島が誠心感じ得させし其神文、間道を攻入て勝利を得る共、大内家の本領相違有べからず、案内しるれば直さま出陣、知らせの相圖と狼煙の一煙、待設けたる諸軍勢、早に迎ひと満うたり、門戸

兵衛の答へもあく以前切たる竹鎧の穂先を腹に突立れば、とり付娘が氣も半乱、頼みよ思ふた弟の義理故隔たる敵味方死るお氣ならおくれいせぬ、早まつた事なされたと歎き沈めば息くるしく古今無双の名將を、山かせぎの猿智惠で計らんとせし身の天罰、國の破れを引出した極悪人の成敗、此竹鎧のお仕置、かゝる因果の罪亡し、大將の心情より、國の相續、其次手、不忠不孝な忤めを行先頼上ますと恩愛餘る親心久吉殆感じ給ひ卑賤よふしき親子が心底實武者之助が妻舅、兒島が親みて有けるよ跡氣遣はず成佛せよさらばくと愁涙を袖拂ふて出で給ふ、諸軍も隊伍嚴よ間道として急ぎ行、泣入娘も是迄と覺悟の刃を以むる父、放して下さんせど、あせるこなたの苦船よ、舅の命捨られし故、今こそ死地よ陥る久吉、遁妙計成就せりと云つしちらりと様側へ、上の仁木武者之助、凜々たる勇氣の骨柄、おまへにこちの人、是ひと

二度愈り、手負の傍よ這寄て、簞と取た始より、只人ならぬ浪人と思ふ。
違ひぬこなたの素性、きのふ陣所で名乗合、敵へを守りし今宵の手段、そ
つちの用意いいかゝ智殿、バアに氣遣ひ下さるな、海手を廻る間道を返
つて山路へおびき入地雷を以て、廢希代の勝利の瞬く内去よても親仁
様、其身計か肉身の我子を見殺すに心底、喰や便なく思されん。此家へ忍
んで猿冠者を討取ひ安けれ共、卑興未練と身をかくし、欺し討しと云ひ
れん。大家と仕る武名の耻辱、是よりばつ付戦場にて、眞柴が頭を得ん
事ハ國の洪福、舅の賜、ハ、嬉しく悦べしやと勇立たる猛將の聞へ
末世よ隠れなし、表へすたくきかん坊、勢ひ込で駆來り、親仁殿、檀家
の頼みよ大將をとつくりやつて山道へ、村境から勢揃へ、ゑいさつさつ
とたつた今、いたを見付た。宍賢、ヨリよい時分仁木様早ふお出かけなされ
ませ、志かしかひいや大勢が、皆一時よ焼殺され、朝よ紅顔有て追付白

骨のみぞ残れる歸命無量術ない山坂へ汗を流して引かへす仁木へ開くる喜悅の眉、雲間をきつと打詠め我國の火精を以て東より列る敵の木曜、一炬の焦土となさんず計略水生木と北方より助る水氣の味方の凶事、怪しやと伸上る岩國山よ雲覆ひ忽ち降くる雨の足雷光ひまなく鳴神の響き渡つてすさまじく孝郷怒りの歯がみをなし思ひ寄なき此天變謀の人は有功をなすべき天運、久吉又及ばぬよあ無念くと降雨よ争ふ涙はららく妻もうろく門戸兵衛悴を殺し身を捨て計りしも皆むだ事何とせふとふせふと騒ぐ二人を押玄づめ此上に無二無三久吉が首取か叶ひぬ時ひ切て切死、舅殿、女房さらばと勇者の別れ一振ふつたる館の柄よ風を切てぞ駆出たり親子の心も空よ雨か涙の幾玄きりすのや合戦半と見へ蝶の音太鼓人馬の聲ア大勢よ只一騎いかゞして防ぎ玉のん聟ひいかよ夫の何と早討死の時刻かと見やる諸

も吹風よ、逆浪打込藁家の軒、内も生死の沙境夫の先がけども様の、未來
のふ供と懷鉢咽み貫けば娘出かした潔よふ死でくれ仁義を守る久吉
の、此神文よ違ひぬ様跡み残すが國の爲と探る手先よ以前の竹先よ狹
んで様側の柱よ玄つかとくより付、よろめきながら親と子が往様來様
の通ひ路も満千沙の寄返る浮身の終りなむあみだ佛く、今ぞ引どる
波打際、俱よ落入荒海の哀計ぞ残りける、磯うつ波の真砂地を踏立蹴立
武者の助、欠戻つたる阿修羅の勢ひ、舅殿、女房共、親父様と呼と答へも様
先よ、玄たしる血沙の二人とも、此海底よ沈しよな、残りし一書の久吉が、
和睦を誓ふ自筆の神文、奇怪至極と引裂捨、縦横無盡よ尋ねれ共討もら
したる大領久吉、我も海手の間道より、一先退き時節を待、真柴が首取手
向んど心よ誓ふて立たる所へ、櫓を押切て上方勢士卒よまじいるきか
ん坊、船ばたよ大音上、アうつそりの武者の助、我を誠の同宿と思ふはそ

つちのあての梶、佐々木盛政が家來柏谷の藤治有がたやから取入て、そ
つちの工みへへて、嶋坊主手並を見よと下知する矢禍^{ヤハラ}舌長なるうづ
止めら、此世の暇^{ヒツヅク}くれんすと、舳先^{アキ}手をかけ周處^{シラフ}が勇打返したる大灘^{オナン}
よもくすと成て塵^{スミ}、少しひ心晴渡る月^ハ、西島苦済船^{クジ}へ乘移^{ウチ}つた
る其跡の、血汐^{サカナ}又名残り有明の嵐^{アラシ}、連て漕船^{トコ}の末白浪路^{シタハラウ}を、窺ひ寄^{ミハチ}英智^{エイチ}
の大將隨ふ兒島^{アマミ}仁木^{ニム}が船の行先こそ、誠の間道^{ミダラ}ござんなれと見ど^ムけ
よ兒島元兵衛^{ハシ}と手早^{ハヤ}と小具足^{ソモニ}を身輕^{ガラ}と脱捨^{ハキスル}飛込^{ヒコム}水術^{スイジツ}浮つ、沈んつ「幕
ひ行

○七冊目

神^{カミ}と君直^{タケル}なる御代^{ミヨ}と周防^{スザン}の國、一の宮の鳥井^{タカイ}先、参り下向^{シテマサ}を松かけ^{マツカケ}、茶
店半分片店^{ハーフ・ハーフ}は時代世話事讀^{ヨリカコロシヤハラ}分講釋^{ワカカラシヤハラ}、榮來丹次^{ルイタニジ}と墨^{スミ}ぐろ^{ムラサキ}、張紙^{ハガキ}べつたり
謂人^{ハナシ}とも毎日押^{ハサフ}も分られず、一席仕まい休息の間もあやくや^{ハナシ}いづれ

も、扱今まつともの前講まへごうの聞事ききではござらぬか。こちどらも張良ばりよしが謀ねらひ習ならさふて、
節季せつきく掛乞かけごひともが取卷時とりまきどき、笙さやのかなり又輕業かるわざの、ちやるめらでおだて
かけたら九里山くさりやとあちらこちら陽氣ようきよ成なて逝ゆふろかい、こいつれよい
わいの、其謀ばかりごで思おもひ出だした、此國の殿様との大内様おほうちさまと久吉殿くよしどどの大いおほい、せ
んとも岩國山いわくにやですつての事、眞柴殿ましばの燒討やきうちみ合あれる所、俄にわか々大雨おおあめが降ふて
來くて討うもらしたげなの、そふじやといの、夫めから兩方軍りょうぱうぐんもやめて、よら
み合あてゐるばかり、殊こと々町人百姓まちにんひやうみおかまひなく、隨分金設すいぶんけして賑なま
いしうせいとのふ觸ふれじや、そこでふれが思おもひ付つけ、近年きんねんの何なんでも角力すかじゆの番ばん
附つけみする事がはやるよつて、軍ぐんの勝負附せうぶつけくと賣うあるいたら錢せんみな
ろかい、兎角とくかく下さをあられましやる殿様との神かみも納受のうじゆなされたやら、あれ見
や志おもやれ時ときでもあい、神木の櫻さくらのさかり、見事みじやないかと、我わ一の咄とつ
し半あんぱんへ講師こうしの丹治席たんじせきへ直ただつて、聲こゑつくろい、扱唐軍計まわらとうぐんけいもあまり珍めずら敷ひらご

さらぬから後席へ此間より當世眞世話嘲講釋を仕ります、則ち昨日ハ團七九郎兵衛一寸徳兵衛攝州住吉霞松原にて口論の一件づいゝ片袖を取かへし兄弟の約をなしまするハ、ナ桃園みて義を結びし玄徳關羽が心々同じ右九郎兵衛が舅三河屋義平次を切害し既々召捕るベカリし所、一寸三ぶなどが厚情みよりまして、備中玉島へ下りまする迄でござります、又其頃浜花の市中をあぶれありく、五人男といふ者あり、所謂袖ふり男達是なり、其首領を鴈金文七とす、身の尺七尺、面皮清らか致して力飽迄強く、從ふ手下正九郎、たけ抜群として、眼にてれる星の如く、一聲雲とぞうくが故み、世こぞつて雷の正九郎と號たり、其外あんの平兵衛布袋なんど、いづれも一騎當千よして無双のがうけつ、武士町人の分ちなく、投倒し踏飛し、あたかも群たる羊の中を猛虎のかけるよ異ならず、四角八面あぶれ廻る、理り成かな此鴈金文七、宅間流の奥義を

極め、智謀軍術たくましく、賤しき紺屋の慄なれ共、後々宇治の常悦と變名仕り、夫より大明の味方とあり、千里が竹又分入て酒呑童子を亡す、又明日と出次第、云廻したる口拍子、聞人も鞠れてこりや氣疎、千里が竹の林より、太郎のはなしの聞人とも笑て歸れば、榮來丹次鼓簞の影へ立て入、折から先手の家來共片寄ませい片よれど、道を拂ひせ井上新左衛門元晴、折目高なる上下衣服、二腰道國取の家臣と見へし其勿体、來かかる向人へ年ばいも甘の上り六つ七つ、出海左衛門が妻の眞弓、神々願ひをかけまくも忍び詣の下向道、夫を見るを是はく宗定殿の御内室暫くへお物遠、あなた様もお息もじ、成程く、此間の合戦より、敵も味方も軍をやめて日を送る、搦々退屈氣べらしがてらの代參心もせけべお別れやと、挨拶そこく行んとする袂を扣てまづ暫く、少迄はなけれ共、此度の曠軍譜代外様いふ及べず、未々の者迄も命をお主み

拋つ戰場夫左衛門只ひとり、軍評議の席へも召れず、出勤無用とは前の仰い意趣有人の讒か神の力又曇りなき、身の云譯も立やうと日毎くの歩詣、あなたのふ目又かしるもほ利生、お上へよしなお取なし偏よ願も上ますと、餘義なき詞より新左衛門同家來共社參の様子神主方へ早く案内と下部を遠ざけあたり又咲たる山櫻の枝を手折て傍よ寄、拙者が返答此通りと、さし出す一枝打詠め時ならず咲此花を、返事とおつかやる、ホ當春宮島千疊敷同ふるて、正清を見遁し歸す、妻女の縁よつながれて、玄たしき一家の出海左衛門、返り忠も有んかと疑ひかしる返り咲、又一つの頼みい、其元の父小坂部兵部義廣公兼ての懇望、味方又歸伏致されあべ、自然と晴る主人の疑惑汚名を雪ぐ花となるや、歸り咲の不忠不義と後指さしるゝや、善惡二つハ一つの返答、どくと工夫を致されよと、花よそへし井上同實朋友の眞なり、聞よ眞弓同胸せまり、兎

かういらへもなかりしが、思案極めて、そうちや、命よかけて父上を味
方よすしめ、二心なき夫の忠義を顯ひさせ、御前の首尾の元晴が刀に
かけて鹿略^{セリヤク}になし、必ず吉左右相待^{アサヒシテ}す。おさらばさらばと目禮式^{メイリ}、夫思
ひの一筋道^{フミカツ}、操^{ハシマ}み心はり詰^{スル}し真弓^{マハコ}別れ立歸る。時分菱簾^{ヨシマツリ}の茶店より、出
る丹次が相圖^{ヨシヒコ}の呼子笛^{ヒコヅケ}の音^ネ、寄鹿ならで、爰かしこより一時^{ヒトチ}、あらん
れ出たるあまたの力者、井上遁^{ウエノミサ}すな討取^{タマリ}と追取^{タマリ}かこめ^{カコメ}ペ^ハ。何やつあれ
バ此狼藉^{ラヨウ}すされやつときめ付る^{ハタハタ}。榮來^{ヨシラ}丹次と仮名^{カニヤ}して此
國へ入込し某こそ、大友家の勇者と呼れし瀬戸坂兵藏、主人を一ぱいす
すらした、鉄炮鍛冶屋の俄武士^{ロク}、かくごひろげとのよしつたり、元晴かん
らへ、からと打笑^{ハタハタ}ひ、軍とぼしく事がなと、相手ほしきどうぶくら、玄ほら
しき抜^{ハサキ}がけ呼^{ハタハタ}り、ならば手柄^レよ仕^{ドメ}て見よと、股立^{ハタハタ}きりと肩衣^{カタヌカ}刎退^{ハサハサ}
大手をひろげてつゝ立たり^{ハタハタ}、よつとい廣言^{カウガン}者共、まつかせ一度よ組

付を、取てい投のけ人礫折よ、神樂の笛鼓音も紛れて「目さましき、勇力無
双の働きよ、腰骨肩骨いたやの震ばらくべつと逃散たり、調神慮を
恐れ雜人原助けて返すが放生會味方の武運長久を、猶も祈の太祝詞、義
心岩戸を押開く、神の勇力加いつて時々大内の勝鬨かちと、いさんでこそり
もふでける

○八冊目

老ぬれべ麒麟も驚馬と身退き、我領國も引籠る、小坂部兵部音近、真柴大
内の戦ひよ寄す、障らぬ老將の胸の器も廣書院案内と俱よ入来る、大友
三郎景澄、斯と玄らせよ館の主兵部音近、家よ杖つく岩疊作り刀引提出
向ひ、互々挨拶事終り、今隣國大内を責討んど、眞柴久吉大軍を催ふし合
戦最中、簇下の大友何用有て、入來なるやど不審顔、成程貴所よも存じの
如く、某始列國の諸將、久吉の幕下よ從ふも時の權威、武勇自慢の大内さ

へ責付る勢ひなれど、足下の武名よ恐れてや、手だしもせざるゝ道家柄、殊よ長壽の賀を祝す、寸志の品早くしの詞の中、家來が運ぶ白臺よ巻絹、黃金美酒佳肴、お鬚の塵とる琥珀の硯珊瑚のつゑ突熨斗包み、廣様せばしとならぶれば、真柴久よじ冠者義廣、二虎戦ひしめ、一虎は亡び一虎の勞るゝ虚を討んと賄賂の麥飯を以て、ばちすばの我を釣んといふ愚くと取あひぬ詞よ三郎膝すり寄弓矢取ては西國よ人も手を置小坂部殿、わづか當城の主となし置け残念至極、拙者よ力を添られなば、真柴大内も討亡し六十餘州を手中よ握らべ、九州一圓四國を添進上りと宛もなき雲を便の空頼、聞も敢ず打笑ひ、ハハ、甲よ似せて穴を堀蟹侍とい貴殿の事、我鉢先みて切取たる一國一城恩よきるべき主もなければ、向ふべき敵もなし、足事を知て此城よ世を我儘の隠居親仁、國郡望よおりないよしなき音物穢はしと歎み絹させぬ、老人の詞よべなくいひ放

せば、短慮の三郎ぐつと詰かけア一大事を口外させ、いやならよいいで
濟さふか、胸を定めて返答せよと切刃廻せど、見やりもせず、餘所よ吹な
ず煙草の煙騒がぬ丈夫よ氣を呑れ、こゝげ立ども負ぬ顔かほどいふて
も相人よならぬれ、扱ハ某が武勇よ恐れし物ならん、老人相人もおと
なげなし、頼聞ねば此進物持歸るよ云分有まい留て見ぬかと足早よ、大
の逃吼家來共頬眞赤よ枝珊瑚珠琥珀の塵灰付ほなふ志よげよ成てぞ
立歸る、跡よ兵部ハ眉を玄はめ鹿をさして馬といひし馬鹿の上行三郎
景澄數代續きし大友家も斷絶なさん笑止やと、仁なる悔菊の間の襖押
明正清が妻の葉末よ引添し、眞弓といへど弦もなき、胸ハ眞紅よ結びた
る、文箱携へめいくよ、父の兵部が右左願ひ有げよ座よ着ペ兩家雌
雄を争ふ時節事繁き中、妹姉共打揃ふて來りしれ、我賀を祝せん爲なら
ん、思ひざる合戦より、葉末が夫加藤正清、眞弓が嫁したる左衛門、宗貞、聲

と智と敵と敵、去ながら武士の常珍しからず。孫共堅固で居るか
と尋え姉へ會釋して、賀の悦びを幸え、参りし様子へ久吉様へ、何とぞお
味方有様と、是迄お勧やせ共、お聞入ない父上様、御勘當遊ばした弟の和
三郎、今でい眞柴の御譜代同然智も娘も子も孫も、一家一門睦じう同じ
味方よ有ならば、此様な目出たい嬉しい事へない。昔氣質を取置て、朝
日と昇る名將へお味方なされ弟が勘當歟すとつい一口、いふて給へれ
父上と、我身の上と弟が詫も一つも取交し、姉が願ひを打消妹、身勝手
な姉様、私が來たのも同じ願ひ、大内家の家の兩家老、武者之助か出海かと、
いへる。勇士も眞柴の家臣、正清よ縁有と義廣様のお疑軍のお供も叶
ぬ悔しさ、父上さへお味方あらば夫の明りも立道理、孫子不便と思す
なら大内方へのお味方を偏よ願ひ上ますと、いふも涙よくもり聲道の
父も姉妹が、同じ頗ひよ默然と答なけれど猶すり寄り返答なされぬ。

姉様よつくお心か、若お聞届ない時の此箱の封を切、改見いと夫の云付
姉も同じ事、お返事の品又寄此箱を父上より見せて心を定めよと、様子
有げな夫の差圖、御思案願ひ上ますと、同じく傍よ差置べ、眞柴大内兩
家も、是迄再三招くといへ共所存有て従ひぬ、我より見せよと兩人の聲と
智とが送りし此箱、とくと思慮して否應の返答、それ迄預り置、万事ハ
後程先奥へと納る父も一思案夫思ひの姉妹が、上ベよ笑顔つくれ共、胸
ハ蝦牛の角隠す、心くを三方へ引別れてぞ「入みける、秋ハ殊更物さび
し、千草、よすだく虫あらで、臺子の盃の音すみし、數寄屋待合前裁の露路
と勝手を忍び足隔合たる姉妹が、心も先へ飛石づたひ、それと眞弓が姉
さんか、妹爰へ何しよ、聞へた、わしを出し拔父上を、大内方へ味方
又付ふと思やるのか、そふいひ玄やんすお前こそ先へ廻つて久吉方へ、
すしめる心でござんせふ、つべこべと口ごたへ、そのきやらぬかと

突のけて行も姉我意隔る眞弓、邪魔仕やんあとふりほどく、風みびよぶ
の柳腰、帶際取て引戻す、腕もかよひき糸薄亂す黒髪兩方が攔み合たる
姉妹喧嘩、争ふはづみ様側へ、こける拍子よべつたりと、思ひず開く障子
の内、闇を樂しむ音近が、臺子よからり獨服の濃茶の手前他念なく出海
加藤が妻といひるゝ身を以てはしたなき振舞、去ながら主家を思ふの
貞節、さのみい呵らぬ、中直い幸く、姉妹中も濃茶の盃爰へくと機嫌
よき、父の詞よ葉末差寄今四海一統、久吉様へ從ふ時節、理を非よまげ
てお味方を、^{イエ}姉様まんがちな、^ヤ父上、義廣様へお味方せふどつるいふ
て下さんせ、^{ハナ}かしましい是非返答が聞たくべ、双方共罷ならぬ、此上に
そち達が持參の品を改よど、取出し渡す以前の箱、心濟ねどめい／＼が、
あたふた明て取出す、様子の何か白布、^{シロヌ}うけふの細布胸合す、と古歌の
下の句、手跡の夫正清殿、わたしが方へ、此扇、^{アラタ}秋來月を観て歸思多し、

自ら籠をひらいて白鶴を放つゝ、ヨリヤヨレ古郷を思ふ詩の心、娘共とくと工夫
を仕れ、ティといへどおどりいが、夫の心白布とかけし扇のはんじ物、
けぬ色目を見て取音近、眞柴が招きみしたがひざる舅も智も心く、け
べの細布胸合すと、一家の縁も此ごとく断切布の離縁の印、そんなら
わたしは正清殿よ、そち計でない妹も、古郷をしたふ詩を、扇面よ書し
送りし左衛門要をはづせし其扇、親骨子骨ばらく、又因を切たる扇の
去状、うはつと計よ詞なく目よ涙の玉手箱明て、くやしき思ひ也、時し
も次々近習の武士、眞柴家より使者として加藤正清、大内より使者として出
海左衛門宗貞、只今是へと知すれば、志をれし葉末も露持心地、よい所
へ夫の使者、子中なした夫婦合がてんもさせずさられた様子を、そふ
ござんす共、わたしとても同じ事、お使者で有ふが此恨、頼む姉様、呑込
だと、初めのもつれ何所へやらほどけあふて引しめる帶も眞身のふ

といひ思ひ、ア縁切たれば他人向、無禮の挨拶仕るな、身も禮服と改めん
といひつし立奥深く入間又程も長廊下、加藤虎之助正清と、親の名をか
る筈市がまだ十才のわんぱく盛年も相生ふ松太郎、父左衛門とはも又
名のかんばしき栴檀の葉ゆしく打通れば思ひがけなき母と母、ア左
衛門殿と思ふたハ松太郎か、よふお亥やつたの、筈市もとも様の御名代
亥やの、長上下の着こなしぶり、よふ似合ふた事ハいの、アお使者の口上
此母へ、イエとし様と縁が切たる前、餘所の伯母様じや、筈市殿の云亥
やる通り、ヨ餘所の伯母様、祖父様へのお取次、お頼り上ますと、云合はね
と兩方が利發リハツゆこまる母親も、何とこたへも口ごもる、一間又かくとも
れ開兵部、老の氣丈の長榜、左右よ小太刀携たづさへて作法乱さず歩み出、久し
く對面せざる中、ハチおとなしく生育しな娘が縁より引れざる小坂部が性
根を知縁を切て孫共を使者よ差越發明さしこよはつめいく、もし此祖父が承引せすべ

其儘でハ歸られまい。とくと思案を定めよと、詞も待す松太郎、此役目仕負せねば、生て屋敷へ戻るなど、と、様のふ詞と云つて手早々上下上着脱バ白無垢麻上下、母の見るより詞、そふなふてはならぬ筈、おどなも及バぬ健氣さを、真似詞が成ならどなたでも、仕て見や玄やんせと聞がしの、詞も耳詞、當り障り詞、妹親の口から子をほめるは聞よくい、それ程の事仕兼る様な笠市ではない、いのツ祖父様が味方付てくだされば、死しゆる覺悟きわめ、極きわめてぬます、そふて有い、早ふ用意と上下の紐ひもを解やらはとくやら上着脱せば、同じく、下の無紋むもんの死出立しじでだち、見るよりはつとつと思ひながら、出か玄やつたのみ、眞實極しんじつたそなたの覺悟誰も口でハ立派やいへど、まさかよ成なると、臆病風おくびやうかぜ、出安しゆあんい物と始めの嵐吹らんぶきもどされて、姉さん、臆病風おくびやうかぜとは誰が事、義よつてハ命を惜む松太郎、玄やござんせぬ、ソナ、こちの子も同じ事、父上のお返事次第、立派な覺悟見物仕や、松太

郎が覺悟を見せう、見事そなたが、お前がと、我子びいきよ取のぼし詞を
どうよ争へべ、ア無益の論談左程離縁が悲しくば切たる縁を繼合す工
夫ひさまぐ、去ながらわれ達は此坐み叶ひぬ、早く立うちくと立氣
るい、父が詞を用ひぬかど、老のいら立是非もなく出る心の志をり門、親
子の中も隔つる切戸鑓かけてや祖父様久吉方へお味方有べ、わしや侍
が立ませぬ、武士が立ふが立まいが、祖父様にこつちの味方、そふり
成まい、玄て見せふ、出かすく、適勇者の伴共、玄かし大内と付べ篠市
が耻辱とならん、と有て真柴よしたがひ、松太郎が身の上、いづれを捨
いづれをとらん彼獅子の子を様すみひとしく、此場よ置て兩人が眞剣
の勝負を試勝たる方へ祖父が味方、心覺への此二腰、是を以て立合と渡
せば取てめいくが、腰よ道は武士の小太刀の目釘くい玄めし股立り
りしく身辯へ戸の透間を差覗く母と、母とはあられぬ思ひ、年端もいか

ぬ二人の子供、命みかしる眞剣の勝負さすと餘りなむごいひいのと
かきくどく親の思ひぞやるせなき耳もかけず音近い床も直せし鼓
取上我壯年の頃武將足利義晴公數度の軍功御賞美有、猶も武名を鳴せ
よと御と號し此鼓を下賜へり年賀毎々打が吉例、今六十の賀を祝す謠
終らぬ其中又用意よくべと打鳴す鼓のしらべ、白刃の刃拔放して立向
ふ互のかけ聲、鼓の矢聲、有がたや治まる御代のならひとて山河草木穩
かよ、五日の風や十日の雨が下照日の光り、劍の光り打合ふ刃音、見る目
ひやいさあんなさよこらへ兼てかけ入を、いつの間よかは物蔭も忍び
姿の宗貞加藤せいし留れば詮方も泣ど叫べと白砂を一足さらす切結
ふ、武士の扇の直焼刃、付入刀請はづし弓手の肩先松太郎、切込れてたち
たちく母へ見るより悲しさの心あせれど詮方涙さもいさぎよき山
の井の水く山の井の手洗も届せぬ松太郎尖き刃先簾市が高殿四五

寸切付れ、^四 笠市が切れたわいの、^二 沖断仕やんなど、あぶない必負
てたもんなど、あせりながらも親^三 が詞の介太刀牛角の手練、切つさら
れつほど走る、血沙染^一 なす秋草も色を、爭ふ修羅の庭、勝負いづれと氣を
配^二 る、父と父とは千万無量、母は外面^三 は血の涙、祖父^一 の早むる謠のせめ、君
は船^二 臣^三 の水、水よく船を浮べ^一 て臣よく君を、あをぐに代とて返
すくもよきに代なれやく、萬歳の道^二 と歸りなんく、深手^一 よよはる
松太郎氣かざの笠市、まくり立^二 といめさんと立寄^一 るを、^四 待勝負見届
けたぞ、娘共^一 の手負の介抱早くくよ母と母、我身を玄づく東西の鍔^二
づれ押^三 明^一 るとしや遅^二 しとかけ入て、我子^一 よ縋^二 付^三 、嬉^一 しや笠市そ
なたの淺疵神^一 や佛の^二 お蔭^三 ぞと姉^一 の悦²ぶ妹² の手負³ みひしと抱付介抱愚
泣叫^一 ふ、^二 武士の家³ よ育²ながら未練至極、笠市勝負に切勝上の兵部音近
今日も、久吉公へ味方ぞと聞よいそく、姉葉末^一 お馬の先の高名² も、ま

さつた手柄と譽そやす餘所の悦び子心よ、聞も無念さ松太郎^松、わざや
負たか口惜い今一勝負と刀を杖立上れどもよろく見る目よ母に
たへ兼て^詞道理^{だらり}玄やく、道理^{だらり}玄やいのふ武士の意地^{おもち}どん云ながら、
孫の子よりも可愛ひと世の諺^{ことわざ}も有物を見殺^{みする}片意地^ひ、むごいつ
れない父上^{じゆじゆ}と恨^{うらみ}の數矢かぞへ立^{たつ}いふも真弓^{まゆみ}が子^こみ迷^{まわる}、悔^{くやみ}いと^ゞ苦
し^{しづ}ばの、引入息^{いりき}を張詰^{ぱりつめ}て^詞、かしまず、祖父様^{じゆじゆ}と恨^{うらみ}い、負たわわたしが
示熟^{じゆじゆ}から、大事の役目を仕損じた、憎^{にくらひ}やつ玄やと^と様^{じよう}よ呵られふかと
それが悲しい、もし尋てなら筈市^{はずいち}も負へせぬ、怪我^{けが}よつて切れたといふ
て詫して下されど、今端^はの際^きも名を惜む稚心^{おさむか}のいぢらしさ、こたへく
し祖父兵部、以前の刀拔^{ぬく}も早く腹へがへと突立^{つき立ち}れば、何故の御最期と
右と左よ姉妹取付歎けバ氣丈の手負、眞弓^{まゆみ}が顔を打詠^{うちがめ}て、涙を浮め、^チ恨
い尤去ながら、何をか包まん、松太郎へ最前渡せし、一腰^{いのし}な刃引も同じ

なまくら物去よつて 笹市が手疵ハ薄手斯計らひし一通り、本意なら
ねど云聞さん、姉の葉末早世し、我兄元胤が忘れ 笹某といなさぬ中、同じ
血の緒と云ながら、義理有孫の 笹市が命を助け肉身の松太郎を殺せし
は、さす敵加藤正清、縁を引たる親左衛門、返り忠もあらんかと、主家義
廣の疑念を晴す、骨肉の一子を殺す義者の潔白、此上なしと思ひ寄し
も、義理といふ二字が効ど成たるかや、月も花もかへぬ程いづれ劣
ぬ不便さも、生の娘が生の縁、わけて可愛ひ松太郎、ヨリむだ死とべし思ふ
なよ、年こそ寄たれ無双の勇者、小坂部兵部音近をそちが刀で此如く、小
腕よ仕留いさぎよく、討死せし手柄者、出かしおつたと、爺親がほめこそ
すれ呵りへせまい、心残さず臨終をと、義理の孫子と恩愛よ捨る命の有
がたさ、姉の元より妹が、そふとの玄らす父上を恨んだが勿体ない、開松
太郎聞きやつたか、そなたが死るの爲、負たの玄やない勝玄やと

いのふゞ嬉しうござる、そんならお前も縁切ず元の通りよとゞ様と中
よふ添て下されや、かゞ様、かゞ様へ何所なく玄やチ、爰チ居るく、悲しや
そなたハもふ目が見へぬかいのふ、ア侍の子が未練など笑ハれふか玄
らね共シ死ルる今端カタよとゞ様や、お前の顔がたつた一目それが、くクといふ
跡シテの舌ヒザもとつるシ斷末魔だんまつま、苦ツしかろせつなかル、其苦ツ痛トコロより此祖父が
切カツつはつシの度カタくを、謫ちつ鼓こで紛ハラしても肉骨にくほねを裂さ苦ツしみム、一百三十
六地獄ぢごくの呵責かしゃを一度シテよ請うける共シよも此上の有べきか可愛かわい孫まごやと取亂とりあわせ
し歎なげけば姉あねのせき上あがく、孫子の爲ためよお命めいを捨て恵めぐらみの父ちちの恩おん船ふね車ぐるま
も積のれふか、それ計かひいとし子こを義理ぎりの刃はよ殺ハスすのが悲かなうのふて何な
とせふ、こらへてたもと妹わいみ手てを合あわしたる詫淚わびしきたアン姉あねの勿体もつだいない、斯成か成なも先さきの世よの約束あくせき事こととあきらめても、こんなゆきしい子こを殺ハスす其日そのひも
かへず父ちち上遠あが同ひとじ刀たの憂別うべつれ、神かみも佛ぶつもなき世よかと手てを取とかわし姉あね

が返らぬ悔宗貞も、加藤が手前耻らひて、爰よどだよも得もいぬ胸の
苦しさ目と餘る涙見せじと喰えべる心を察し正清もたち兼たる俱
涙眞に泣寄眞實の涙くゝ暮近き秋や哀れを添ねらん左衛門悲歎の
涙を拂ひ、一子を殺し二心なき我誠忠を顯へすも、憐が孝心舅の情命を
給へる返禮に再び結ぶ智舅、正清迎も左のごとし、大内義廣征罰より
小坂部が討死と記録、残さば松太郎舅の追福此上なしと聞よりよつ
こと打ゑみて、仁有義有味方の名のみ相果る、兵部が末期の置土産、筆
市みあたへし太刀こそ我重代、北辰の二字を彫し武運守護有七星丸、万
夫不當の正清よ劍の威徳加へりて、和漢よ美名を殘されよ、此上頼ハ未
子三郎小坂部九郎音近と、我若年の名を繼せ厚恩有久吉公、御子孫の時
より御大事と見るならば、粉骨盡し忠義を立なば、草葉の蔭より悦
ぶと傳へておくりやれ、智殿と末期の一匁孫娘、これが今が別れかと歎

けどさらよ其かひも、嵐が告る螺太鼓、遠音^{とおね}、響物^{ひきもの}、凌し、加藤が郎等、木村和田藏、かけ來つて大音聲^{おとこゑ}、大内が本城^{じゆうじやう}、山口^{やまぐち}、要害堅固^{ようがいけんご}の絶所なれば、數日^{すうじつ}の對陣時^{たいぢんじ}を待^{まち}、計り知たる海手^{うみて}足利慶覺西國へ下向^{おもむく}と流布^{るふ}せし六字^{ろくじ}の旗^{はた}、武器^{ぶき}を隠せし兵船^{ひょうせん}、押立^{おし立て}く、押渡^{おしおど}る、味方^{みわが}の必勝破竹^{ひっしょくぱちく}の勢ひ、急ぎ出馬^{でま}、然るべしと乍^さ捨てぞ引返す、一大事と左衛門宗貞、劣らぬ正清双方^{しやうがた}が忍び裝束^{しゃうぞく}脱^{ぬき}捨て、肌^{はだ}より小具^{こぐ}足身^{あしじん}をかため勢ひ込^{こむ}る軍場^{ぐんば}の出立^{しゆだつ}、やおれ正清慥^{さう}よ聞^{きけ}、久吉樂毅^{がくき}が術^{じゆ}をなす共、味方^{みわが}の臥龍^{くわりゆう}が備へを立^{たて}只一戰^{ひとたたかひ}、追ちらさん^{まわらさん}、早く歸つて猿冠者^{さるかんじゃ}が首^{くび}を堅固^{けんご}、用心^{ようじん}せよ、^シ案外成^{なまづ}非禮^{ひれい}の過言^{くわいごん}、山口^{さと}如きの破れ城^{はれじやう}、正清先陣^{せんぢん}蒙らば、一撃^{いつか}みみひしいでくれんほゑ頬^{ほゑほほ}かゝくな左衛門^{さわらもん}と、互^{うつ}の廣言^{こうごん}双方^{ふたがた}が詰^{つめ}より詰^{つめ}よる、勇者^{いのちしゃ}と勇者^{いのちしゃ}、女房^{めのぼう}、くへ正體^{せいたい}も、涙ながら^{ながら}よいたれど、かゝる老木^{おき}どもろともよふしやみどりの松太郎、わへなく息^{いき}ひたへよける、わつと一度^{いちど}よ聲立^{こゑたて}、

妻が歎き又目もやらず互々白眼相聟同士、又も聞ゆる攻太鼓あひれを跡み三ツ羽の征矢射るがごとく兩人の戦場として「出て行

○九冊目

やつとせい、こちの殿さま軍をやめて、軍慮帷幕と廻らす物の間の
おさへの盃べかり、吸付お敵よ夜軍を誰も來て見よかしのへ出來た。
くと大將の譽る卷舌大隅が肩と御手を掛け形、こりや軍兵共、切つ
ぱつしの軍せふより、色と酒とが浮世のあぢ、太夫、其に機嫌に嬉し
いが、大事の御身を酒びたらしつとむひかへなされませ、異見とい
かたいやつの、汝等も此盃で一つ呑くと投やる大盃を笠と戴だく
軍兵共、有がたい、大將の下知背かず、察兵衛寺六まあ身共がと一息
よ、春での風は、あらけない風だな何だそりや口合かと此へついでくれ
風で夜討と定めたり、めたりぬる夜の睦言よ、むつ言よ目出たふ侍ひけ

るべれべんがべれべんべんだらりの底ぬけ共さいつ押へ
 つばゝコラ面白いいく、ま一踊おどろでないかアさらべ爰らで鎧武者
 のふぬけ踊が所望玄やが合點かあぶない軍は取置いて好な酒をバ呑次
 第敵の首を討ふより鎧兜を打殺し討死せふより呑討玄やソレそこら
 でせい夢中よ成て踊の最中よがり切たる出海左工門かけ入目先の醉
 どれ共投のけ突のけ打通れば一座の興も醉もさめ底氣味あしく尻込
 する士卒をはつたとよらみ付追つけ寄來る敵を引受馬鹿ばか敷此有
 さま銘めい持口大切よ早行はやとするどなる詞よ皆みな顔見合せ拵ても
 堅い御家老の折かた玄かつい御異見よさつはとこまつた鎧武者とあだ
 口くちへ出て行左衛門無念の膝突ひざつきかけ再度の戦ひ久吉が武威よ碎かれ
 思ひぬ敗北ほひほく口惜ながら君を誘ひ本城山口へ引籠り軍議評定せん物と
 飛歸とびかへりし御陣の有様酒色よふけり淺ましき御身持油斷とうだんとやうさん

不覺とやせん、さゝ、早く御用意、くと忠義の一途出海が諫る詞も、白川
又、夜船こぎ出す、酒きげん、^同熟醉又正体なきひ、^オ是非なしと屈託を、我
身一つ又主思ひ、見聞よつらき大隅が何をいふても此お姿、後程お目が
さめてから、夫迄玄バシ御休息といふ顔詠ていか様早西施を五湖又沈
め楊貴妃を馬魄又斬り國の敵は、^ア成程、^ク差扣へる内折入て、そもト
又尋ね問べき子細暫くわれへよ何氣なく、お目が覺たら、呵られふか忘
らぬ共もだしかたない仰、然らばこちへと先又立伴ひ「別間へ入よける
折ふし陣門打騒ぎ、眞柴家とのふ使者なりと呼れば、大將義廣枕を上、其
使待兼たり、早く通せもめれんの下知、呼つぐ内又加藤正清、軍中の姿引
かへて、長上下も優美の骨柄目禮して、上座又付、珍ら玄し義廣殿及ばざ
る戰ひ又、自己の勇威を慢じこべみ、勅命又敵せられしハ滅亡を招く又
あらずや、やうやく利害又心付、降參を望まるゝ條相違なきや、相紀せよ

との上意なりと演ければ、義廣廻らぬ舌打して謂誰かと思へば加藤氏、
ひ苦勞うろく、始めのれど我を張たが、久吉の軍配ぐんぱい旗下の強勇きよゆう嚴し
い物叶うづくぬく所で降参仕ると、榜のひだのふれそれも、居すまいあし
く平伏有、始終覗うかふ出海左衛門つゝと出ア舌長あり正清、久吉實じつよ勅を
重んじ、忠勤を盡すがならべ、禮儀の使者を越べきよ、人もなげなる今の
演舌大内の家ハシ先祖より、天子へ背そむきし事もなく、他國の軍馬ぐんばを領地
入ず、汝一旦の運じょ乗じよじ、無禮の一言我國わがくに聞用る者有べきか、早く歸
つて寄よせ來れと筋をあらしげ云放せばハ、仁慈じんしをもつてのハ使者なる
よ、恩おんを仇あだなる汝が返答へんたう此方より望むよあらず、降参こうさんの心次第併正清使
して其返答へんたうで歸られぬ、主従しゆしゆうと評定ひやうてうして、命めいよかけがへ有ならば
勝手しよくと大膽不敵だいだんふてき、おめず一間いつまへ打通だつとうる跡打見あとみやり出海でみ、無念涙むねんるいを
ふり拂ふりひ、ハ先祖代しやくしよだい武威ぶゐを落さぬ家筋いえすじもかばかり敵あだよ侮むられ降参

との思し立、君より天魔てんまが見入しな、但し所存有てかと怒り歎いて問
詰れば、義廣よひろの答へもなく、あたりの弓ゆみ又大鷹股かりまた、つがふ目當め當の庭前の松
の下枝、かつきと射切的てほやく笑ひ、左衛門さむだ、我心底こころハア一枝、松
の木の下久吉ひさよしを、まつ此こゝごとくの弓勢ゆんせい、アおでかしなされた、夫でこそ
我殿わたくしと、悦び勇めいさバヤレ夫おわるい合點じやく邪魔じやまなる下枝しもえだを取た、木ぶりを見
見たがよい、久吉ひさよしへ降参こうさんして、免めらしなければあの松の木篇きみ直ただよ死罪しそうの
道具どうぐ、作りを分れば公きみと讀よむ公の礎柱はりつけじゆといふ事、木木さらされても軍ぐんのせ
ぬ氣き、長い物ものまけいじやと又も手酌てぢやく、續つづけ呑のみ、あきれ果たる左衛
門さむだ、胸むねとつくと極きよる覺悟かくご、鎧よろいぬき捨座すてきざを玄めて諸肌もろはくつろげ物もの
いへず、引抜短刀ひきぬきたんとう腹はら、突立つきたて、見さげ果た腰こしけ殿だい、さへ玄くわらすして肉身にくじん
の憚ののを殺せし忠節ちゅうせきも皆みなむだ事ことと成けるよな、君辱ほづしめらるゝ時ときの死死を
もつてする臣下しんかの道命どうめいを捨て諫いさめる詞こと、少すくなりに用ひ下くだされかし。數代傳

いる家國を敵の馬蹄^{ばてい}と穢^よさん事、口惜や奇怪やと、怒りの涙はら／＼。
實^{じつ}も大内の兩家老類^{かろうだい}ひ希なる忠臣なり、始終もれ聞加藤正清あゆみ出、
道^{みち}へ出海尤の切腹、義廣の降参^{こうさん}へ勅命をまもる所、別心なき條見届けた
り、是こそり宮島^{みやじま}みて衣笠^{きぬがさ}三位と名乗^{なつり}し贋者^{にせ}、和を計ひし自筆^{じひ}の短冊^{たんじく}、何
ぞの用^{よう}立べき品^{わざ}、和睦^{ほふく}の印^{いん}と手負^{てぶ}渡し、ナ此通り言上^{ことあげ}と、一家の義
理^{ぎり}をよべも寧く心^{こころ}殘し立歸る手負^{てぶ}はるか^は見送りく、殿御^{でご}計略^{けいりやく}
の降參^{こうさん}、誠と心得歸りし正清、此上味方の手配^{てくばい}りへな、ハよくも悟^{さと}りし左
衛門定定、降參と油斷させ敵の不意を討ん爲^{ため}惰弱^{だじやく}と見せし我本心^{うつ}察せ
し汝^なも空腹^{からはら}ならん、ハ、主從心^{じゅしゆ}一致^{いつしゆ}の上^う、本城へはせ歸^{かへ}す諸卒^{そつそつ}を引連
逆^{そぞ}寄せん、是迄思ひぬ敗軍^{はいぐん}もお家の寶失たる故^{ゆゑ}、最前奥^{うろ}みて大隅^{おおぐち}が父母^{うぶ}
の籠^{かたふ}と見せたる短冊^{たんじく}ナ此守りこそ詮議^{じみぎ}の糸口^{いとくち}、加藤が渡せし短冊^{たんじく}と引
合^あしてほ覽^{らん}あれ、兼て知たる其守^{まも}り、合點行^{うりんぎ}ずと大隅^{おおぐち}をどゝめ置^{おき}しも

心有衣笠三位が自筆の短冊、彼が工みと知ながら武道の意地と久吉よ。
鋒先を争ふも勘合の印紛失故違勅の咎を受まじと、天理より任す家の興
敗、真柴を破るに今宵の一舉ぬかるな左衛門、合點と、心の勇みと屈せぬ
疵口、腹帶玄つかと出海へ、山口としてかけり行様子立聞大隅が走り出
るより取組り名をさへ玄らぬ父母の筐の守りに何よもせよ、お胎のや
やの産月のけふかあすかと顔見るを樂しみし甲斐もなふ、二世の君よ
に疑はれ何とて生て居られふぞと覺悟の刀玄つかと押へてサレ侍女、腹
あ悴がかいゆくば、此守りを添幼少みて別れし親を尋ねるとめ、我よ
玄らさべかへらぬ契り、時節を待と手よ渡す、守りよ込し大將のさすが
情の詞よ、こゝろ弱きて泣べかり、いで曠軍の用意せんと、目よ別れ
の一頃、ふり捨奥へ入給ふ、名残惜さも女氣よ、心引るし小車の、我身よつ
らき憂思ひ、座を立兼る折こそあれ、柵外響く鯨波、遠見の軍卒馳参じ、正

清和睦を受合しも味方の虚きを打敵の計畧、西島の門戸兵衛が憚兒島元
兵衛政次が案内みて、岩國山の間道より勢を廻して山口の本城を十重
廿重はたと云ふつどり卷出海殿の歸路きろを立切、不意を打て陣外迄大軍ふし寄
いと云捨てこそ引かへす、障子をさつと冠者義廣怒りの面色髮逆立計
るくと思ひしよ、眞柴が智謀おちいり陷入しな、此上は本城の寄手のやつ原
一ひしき馬引やつと大音上心得引出す月毛の駒つきげひらりと打乗丈餘の
鐵棒てつぼう苦もなく打ふる四天の勇、我身も俱ともとこ迄はるも離れさせじと大隅
が縋すがる手綱をふり放し、戰場たたかひへ女を召連れ、我を愚將ぐぜうと誹謗ひほさするか、
く寄手も込入り、早立のけと仰の内うちどつとかけ入上方勢、得たりと鐵
棒追取わざとりのべ、五人七人一み玄やき恐れてよげ散先手の勢、かけ立蹴立馳
出る、君の御跡大隅が、あやふさこひさわかちなく猶も、玄たふて「迷ひ行

○道行 山路の蠻虫

岩たゞむ嶺の嵐も秋くれて物騒がしき氣色かな。ばるけき山路羊腸たる、嶮岨を凌ぎ義廣へ思へず爰々遠近の、立木のかげも白雲はわけ入跡を埋むかと心細さも只一騎残月と鞭をあげ暫しのくもる身ありともいつ迄斯へ有なんと。いよむ驛路の鈴の音、ふり返り見る陣雲もやしゆさ、まりて玄づかなり、義廣馬上と頭を廻らし樹間の殺氣と猿冠者が爰みも兵を伏つるあ。何程の事あらんと獨言して行先の玄げみと秋の聲ならで、金鐵智なる鎧武者落人やらぬとひしめいたり。ホ、玄波らししやさしやと例の鐵棒ふり上てはつたりてうくきりくす、我も松虫鉛虫もひづめよ、かくる轡虫露の玉虫きへくよ、鳴音殘して蠶勢跡よ見捨て行となく、心せかるし、岩波の苔の下行水の音、難所のわたり早瀬川、此駒よくいかれせんと云む内、いづくらかは白鳩の兜の上を二三遍廻りくて谷を越飛行さまを見やり給ひ、正八幡のつかひしめ、

鳩の行衛の神明の導き給ふ淺瀬だと、一鞭くれておどり越、劉玄徳が檀
溪の例も斯と「いざ白菊や、小萩原薄の穂よも落人の跡を、たふや、女郎
花走付たる大隅が、あの山影を廻る迄、お姿見へさせ給ひしといづれ
へお出なされたぞ、義廣様我君と呼どこたへもなく鹿の俱み夫乞聲計
、聞へませぬ殿様道さへたらぬ山中よ捨られし身のつらさより、お胤
いとしうないかいのふ、思ひやりなき胴慾もしるしの守り父母の、守
りぬなくて、筐こそ仇と投込谷水の哀れを告る身の行衛誘ふ嵐よ吹送
る遠山松の葉隠れよ、義廣遁すな生捕と君を取まく木の葉武者、くひあ
いや只ふ一人、人も梢も紅葉して、空よこがるし我思ひわたる瀬もなき
谷川のせまき流れよ程もよくさしかゝりたる古木の松が枝、二世三世、
緑をからみし葛城の糸の岩橋中絶る、契りとしらで只、一筋よ帶引えめ
てよぢ登る、女心の一念力かゝれる苦よ踏すべり、足手もさける花なら

で、鳶の錦をさしがみのいとも、危ふし

○十冊目

山又山更よ幽成、秋の調べや、琴の音の、御簾の隙もる殿造、梢の、錦立田姫、
絹織家共疑へる、風も悲しむ戰場と、鳴の冠者義廣は、立たふ敵を退ちら
し、谷川づたひ白鳩の、跡を求し此家の軒我を導く白鳩の、爰より至りてと
どまりしへ、ハテいぶかしき館の構へ、聞ゆる調べへ想夫懸、いか成人の閑
居ならん、我も兼てへ好る道引合せより取出す名笛ふきをめして、琴の
緒よ、和する秘曲の戀々と、斷腸の聲をなし呂律へ、風よ、飄り、谷の水音松
の風心、してもや吹ぬらん、内へもれしか、琴の音も絶てひそく、婢子女
が、雁金人里遠い此山中、かいつた音色じやないかいの、名月の云や
る通り、狐か但し、姫様の琴の音よ、浮されて、山の神が來たので有と、お
づく二人の差覗き、今の笛あなたかへ、爰へどふして、紅葉狩の

御趣向、惟茂様でも有まいし、女を鬼と取違へ必聊爾なされなど、されも云寄詞の品、一陣の敗將、少しの勞休めん爲、暫時の舍りぬ免有と、駒つなぎ捨大やうよ、玄づく通る大名風、二人の頓て押隔ア、顔又似合ぬあつかましい後室様の留主の内、山の神でも天神でも、内へならぬとさゆれペ、ち暫らくと御簾の間々、留る蘭奢の一薰り、振の姿もいと清く、月のもれつる其風情、女計の山住居こそならず共、音色やさしき笛竹の、ゆかりの暫しの足休いざこなたへ、女共、サお通りと媚けば、心有琴の調へ主の芳志添しと、伴ひ入顔見合す顔ニアこなたれ、ああたれ日外宮島みて、實も逢見し畳の女中、岩國屋といふ町人姿、誠に大内、アイア落人と成我身の上、迷ひ來りし山奥よ、思ひも寄ぬ閑居の玄づらい、ウ導く鳩の舍りどいひ、此家のむざと動かれずと座よ着給へ、姫の悦びほんよああたれ落人様、軍ふ負遊バしてたつたふ一人、よふまあふ負なさ

れたな、是程嬉しい事はない、名月鴈金、何をうつかり追付和子のお歸り時、迎ひよ行でござりますかへ、日頃の、お噂ち雁金、あなたのそぶり合点かや、皆迄いやんな請取た。山の神様おゆるりと、そこらを宜しう、ナヤ、お頬ナ上ますと、笑を残して二人連出る間を待兼て、おなつかしやと縋り付、すげなくも振拂ひ、假初の戯れも、互にかかる此姿、うかつげな事仕給ひそと、咎られて、今更、耻かし振の袖几帳姿、形にかかる共名よし大内の君様と、玄らいで仇よ、戀草の種まさ初てよいものか、これがくしけふの今、床しいお顔、三千年の花より稀の、逢瀬ぞや、過越方の契りをも、忘れ給ふ、胸懲と鎧の袖、縋り寄、涙の露の緋威、朱の玉散如くあり、恨の理り去ながら、心得がたき山住の、由緒を聞ねば、心の疑念、白が身の上を承知の上みて末の契約、ナ上ねば、契りも是迄假の舍り得と思案を致されよ、後刻と計云渡し心を、奥入給ふ、姫の始終、胸せまり、

明ていれず明さねば、二世の契も薄紅葉はかない縁よ成ふかとかこ
ち涙の折からよ、ゑいさらさら／＼ゑいさら／＼此車、真紅の綱手引婢子
女が、紅い深き上の衣、木々よ照添艶姿、錦帳かけし輦の、内より出る此家
の老女シテ、そぐりぬ朱の小打着、や袖よ抱し稚子チコ、並々ならず見へよける、
皆大義アリく、大事の和子の、痘瘡、紅葉の色ハ出物の薬山あげから水
もつ、かせ口よ成たばゝが嬉しさ、姫君よも喰ふ待兼ミタケ、ゑい／＼と石
壇ゼンを上るひあいさ心得て、和子様是へと抱取、姫も涙の色目を隠し、伯
母ヒメは前今お歸りか、若の機嫌シゲンもよい様子、鴈金、最前の品こなたへと仰を
菊の一枝ハ、此谷川へお留主の中、流よりしを和子様へお慰ハラシムよと差出せ
べ、是ハ／＼彭祖ハセイがたもてし八百歳、壽命目出たき其一枝、昔の若
い折あらば、祝ふてぱゝも舞の一手ホノハ、あられもない事いふた、是も少
しお菊水ハナミズクの酒シロの科シカぞと敵シテし給へ、常から聞ておりまする、昔の舞のふ

上手と、名を取た後室様、是非とも所望姫君の、琴の調べも若様を祝して
ちよつとしほのめけば、譯もない事云出して、めいわくながら、儘よ。
若やいだ此姿、必ず跡で笑ふまいぞ、扇がへりへ此菊の、枝取持て立上り、
和子もよこく、かわしい筈よ、そも扱も此君へ、誰人の子成ぞ、天下一
人の、花の兒よく、真柴をのけて、連ておどやろよや上方へ、吉野初瀬の
花よりも、紅葉よりもいとしき方へ此君の、齡ひれ千代もかへらじ扱て
も見事お上手と、口よほむるを耳みもふれず、心得ぬ琴の音色、常よか
へりて殺伐の、調子へ此家へ、姫君、わらへが留主よ、何人ぞ男子でも參
りしかと、問ひれてはつと心の驚き、傍から引取名月、^月ふる留主よ來たり
其菊計、花のおかげで珍らしい後室様の舞ぶりを、今一度見たい雁金秋
雨木の實でも草花でも、流れてこぬかと谷川へ、今一つこいばいよやう、
後室様へ上ますと昔唱しよまざらす氣轉て、何やら流てくるぞく。

是れめでたい松そふあ、後室様へと書き寄く、何じや、守り袋がかゝ
つて有、はらうじませと差出すを、老母手々取、此裂の花兎、心得すと紐
とくく、ひらけば中よ覺への短冊、夏の夜の夢路はかあき跡の名を、雲
井よ上よ山郭公、此歌の夫の辭世、わらひが手跡、此谷川へ流れ寄し、ふ
しづくと打守り、いぶかる氣色、いぶかる姫、聞覺へし其歌の爰へ
とふして、妙共猶も流れよ氣を付きやと差圖、皆く寄つどひ、最一つ
こい姫様の、お待遊べす川上よわれ見や今度の美しい、大きな物が流れ
てくるわれよくとどよめく内宿世の縁か川岸へ、流れよりしを見て
胸り、ア疵だらけの女の死骸、これかくと立驕ぐ、老母もそぞろ氣よか
かり、捨身か但し人の所爲か何よもせよ、死骸を岸へ早ふく、血沙の穢
れ若君よ、あやかし有て、い猶大事、姫君俱よ一間へと氣を配る内残りの
戀、この死骸を引上たり、老母の立、疵口より、六脉看相得と改め、

早事切し急所の痛手、所詮存命叶へぬ共、一度蘇生させし上様子を尋見
ん物と、錦の袋取出し押戴いて死骸の肌へ納る寶の奇瑞よりや、服せし水
を吹出し吹上うんと一聲、ソヤこそと、秋雨鴈金耳よ口、女中様、くのふと
呼生るむざんやな大隅が、かい亡魂も夫玄たふ、愛着心も引れきて、息吹
かへし、目を開き殿様、く、我君様と死でも忘れぬ煩惱の迷ひくして這
廻るを、女中心を慥々尋る子細、此守り入たる短冊、持主へこあたか
と、手も持すれば探り取、親の筐の此短冊、見るも付ても恨めしい是故
よこそ捨られて、早瀬を渡る、薦かづら二世の縁まで切果て、岩もさかれ
し身の苦しみ、八寒地獄皴の山、こがれ死るいといねど、今一度逢たひ
義廣様、此身計か腹な子も、十月の今も持孕り、非業も殺すか可愛やな皆
様のお情より、死だお胎を切あべき、身ニツムして其跡の、亡骸よきよ頼
上ます、方よ一つも生れ子の、お胎で無事よ有ふかと、それ計が今際の樂

レミ、顔見ぬ先よ死ぬ母が心を推量してたべと苦しき中、子を思ふ、親の心の三瀬川浮む瀬さらよ、見へざりし、扱ひと老母が胸ハ板守りを添て別れし娘、やどせし種の初孫も、俱よ殺すか不便やと目よは、泉のわきかへる、心のせつなさ義廣よ縁有様子名乘もあらす、せめてとちゅの、思案を定め、それよ、庭よ祭りし此石は、大内家よ由縁の名石、先祖の守護神子孫の安産守りの外よ泣入りし手負を取て石上へ仮の産家と抱き寄血脉よこぼす、血の涙、雨とそゝぎて、清めの手水、猶も實の靈驗を見せしめ賜へと額よ當、心よ願ひかけまくも神よ、祈の眞實心、名家を助くるは奇特、空よありく白鳩の伸羽ゆたかよ飛廻り、應護の神力平產の初聲高く聞へける末の榮へぞいちぢるし、老母は覺へず聲を上、ア有がたき實の奇瑞傳へ聞右大將頼朝公の公達石上よて平產有、住吉の誕生石、氏のかれど男子の出生、吉例目出たき水子の榮へ隠すよも隠されぬ、

此ばし
が孫玄や
いのふ
、そんなら
わたしが
、証據の歌は母が手跡
家來
預け其後の便
送りし籠の短冊廻りく
てけふの今逢と其儘
死る娘安堵の往生させたさ
、今迄包し名乗合真實真身の親子玄や
いのふ
添い我君様守りの主が知た
此事を上未來の縁が
結びたい母様
問たい事我子
彼所
目が見へぬ息有内
殿様
よ逢て此子が渡したい逢たい見たいの其人
爰
有共玄らぬ火の餘
所
心をつくしがた名のみ残してきゆる身
母
取付可愛やあ
望有
身の悲しさ
可愛ひ娘を三つ四つでいつを逢瀬の生別れ
今死る期
母が手へ戻つて來たも因縁か
や長の年月行箱さへ尋ぬ母を明け暮
さぞや恨で居たで有夫子の名残云
たい事岩間
秋の草苔の頃
成たかと取亂して正脉も涙く
よ誰とも歎き數そふ計なり哀れを
告る鐘あらで御
響攻太鼓老女の心つくと
傍
聞居る二人の女

何思ひけん目くべせし、奥の間さしてかけ入りたり。怪しや此家を取密
寄鼓、我身の凶事か何よもせよ、姫君、く、春姫様と呼聲共々走出、申、今
迄付添三人の女、久吉方の廻し者若を奪てどつちへやら、ヤベくそれ
と計氣も逆立、かけ出す懷赤子の泣聲足、手まとい、たゞかられて信若
君を、奪取られたり口惜やと、立て見居て見、無念の歯ぎり猶もかけ行後
の方調江州比良が嶽の城主柴田修理進勝家の後家小谷の方、大内鳴の
冠者義廣逆意の證跡見届たりと、立出給ふをはつたとねめ、我を小谷と
呼かけて逆意有との何を以て、近曾宮島みて絹笠三位と勅を偽り、表
れ和睦内心れ好を斷ん汝が姦計其時加藤へ送りし短冊、柴田が辭世と
まがりぬ同筆、其守り故大隅が、不便の最期蘇生して平産守る寶の奇瑞、
有所は是と庭々飛おり、件の大石からくと取て引のけ土中の印再び
我手より入りと、ゆつと笑ふて立たる所へ、又もこあたの谷蔭同、小田三

代の武將信若、君眞柴久吉守護せりと抱き参らせ出給ふ、お供々付添以前の姫我々ハ福島小西が妻女共、此君様のお迎ひよ疾より入込奪取たり、柴田氏の奥もじ様我慢をやめて日月のほ旗を返し給ひあべ、信若君ハ四海の武將春姫君ハ大内家へ和睦の印ふ取持、生れしが子ハ世謙様、三國一の大將の捌きハ斯と諒れば、聞無念さも道の老女、思ひ定てどつかと座し、信若君又鹿略なきい、其身の冥加恩又ハきぬ、わらひが恨ハ夫の怨春水薨玄給ひし後、久吉又心合ざる我夫柴田勝家殿時又栗津を餘所又見て、比良が嶽又引こもり、瓦又争ふ運定め終よ頼も夏木立朽果賜ひし修羅の妄執晴さんと我も自害と云ひふらし年月謀りし念願も、今ぞ叶ハぬ身の終り久吉仁義の心あらば、若君姫君兩君の納りよき又計らへど、覺悟の刃をとゝむる姫是迄厚いひ介抱に恩送りハ此水子、我身又かへて養育もならふ事なら存命て、教訓頼む伯母に前と涙の袖を

振放し、意地を立るは武の表、夫へ云譯兩將の、疑ひ晴す自害ぞと、突込
刃^{いは}段^{だん}と懷折^{はるか}て遙^{はるか}と飛散^{はな}た。詞こそく、日月の旗懷^{はたくわい}中^{ちう}有^あべ其身^み
劍^{けん}立^たざる筈^{はず}死^しをと^とまつて夫の菩提^{ぼだい}君の^{きみ}先途見^{さと}と^げるも天照神^{あまてる}
の神勅成^{せいか}ぞ、違背^{たが}有^あなと久吉の切拂^{きぬり}ふたる頭の霜、一句^{いふ}よ伏^ふする餞別^{はなわげ}と
天子の^{てんし}旗^{はた}はた竿^{さお}よ、さつとかけたる月日の光り、久吉重^{かさね}て大内^{おほうち}よ向^{むか}ひ
互^{ほか}の寶失^{うしな}し故云合^{あつ}せすして暫^{まことに}の確報^{くわいしらう}小田の正統^{まさとう}信若君を守奉^{まつ}れど、
今^{いま}水魚^{すいぎょ}の交^{かわ}たらん^{まじは}我^わ逆^そも白鳩^{しらは}の導^{みちび}く靈驗^{れいがん}神慮^{しんりょ}の和平^{へいへい}爰^{いと}に納^なまる
軍の始末^{しめつ}義廣^{ぎこう}の明察^{めいさ}達^{たが}はぬ兩家の因^{いん}此家^{じけ}をさして^は注進^{ちうしん}と呼^はり來^る
る雁金^{かり}、お傍^{そば}さらずの曾^そ呂利^りが女房^{めらわらわ}兩家和睦^{はな}太平^{たいへい}と諸軍^{しょぐん}も勇^{いさ}む歸^き
陣^{ぢん}のお先^{まへ}ふさぐ仁木武者之助^{じゆしゃ}久吉公^{きみ}よ見參^{けんさん}と無^む躰^{たい}よ軍^{ぐん}を始^{はじ}る結構^{くわく}
例^{たと}の荒者^{あらわら}其儘^{そのまま}で^は敵^{てき}も味方^{みわが}も内證軍^{ないせいぐん}、アお玄^{くろ}らせと訴^{うな}ふる^ま、仁木^{にんぼく}か鹿^{かの}
忽^{ひそ}の合戰^{あつてん}は互^{ほか}の和睦^{はな}をさらざる故^{ゆゑ}、義廣向^{むか}つて制^{せい}すべし、久吉殿^{どの}よ^い跡^{あと}

と召馬引寄ゆらりと法の門出せし、其大隅が亡骸をよきよ印の石の
下、領城塚とも末の世よ呼ぶ追善や、は祝言蝶花形の春姫の興入國入若
君を守護するは武運久吉公見送る老の一奏千代よ八千代を細石、灑よ
殘る涙の種姓が窟のもみぢ葉を踏分てこそ下山ある

○十一冊目

山口の絶所をふさぎ久吉の歸路を立切武者之介先を争ふ陣頭よ、自ら
進む其勢ひ、只烈風の如くよて、群がる中へ割て入、縱横無盡よ突迫る尖
き鎗先當り兼引色立て諸軍勢四方へばつと逃ちつたり、かしる所へ加
藤正清かけ來りヨレ物よ狂ふか武者之介寶の失しひ柴田が後家小谷の
方があす所事明白よわかりし上、眞柴大内の和睦調ひ目出度き歸國を
支ゆる、いか成所存と云せも立ず、和睦とい云がひなし譬主人の承
知有ても此仁木ハ不得心、勝負も決せず此儘よ退いて、西島よてつが

いし詞の反古、一旦合戦と極めし心の金鐵、すこい勝負と、詰寄所へ太内
義廣出海井上引連て、後れにせよかけ付給ひ。ヤア武者之介、久吉公の稀代
の名將、小田の正統信若君を守立んと有、誠心を感じし故、弓矢の義を捨
和睦の上へ、眞柴大内の水魚の因、但し某が詞を背き、譜代相傳の恩を忘
れ、此義廣よ弓引か。それへ、サバくと理よ詰られ、流石の仁木も屈伏した
る其折から、小坂部和三郎大友を生捕て家來よ引せ出来り、資を盜讒を
かまへ、眞柴大内の兩家を亡ぼし、天下を奪へん下工み、殊々新左衛門ハ
俱不戴天の親の仇討て本望とげられよど、聞より井上飛上り三郎が首
討落し、悪人誅罰せし上へ、互々目出たきに歸陣と、心解あふ諸軍將、兩家
の因、萬歳と野山よ満る百萬騎皆一同よ祝しける

寛政五年癸丑七月十六日

蝶花形名歌島臺

終

明治廿四年八月十九日印刷
明治廿四年八月二十日出版

發行者兼

内藤加我

日本橋區通四丁目四番地

印刷者

瀧川三代太郎

日本橋區新和泉町一番地

發兌

金 櫻 堂

日本橋區通四丁目四番地

